匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ

平 成 2 年 3 月

島根県匹見町教育委員会

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ

平 成 2 年 3 月

島根県匹見町教育委員会

序　　文

本書は，匹見町内における埋蔵文化財分布調査第３年次の調査報告書であります。

本町は埋蔵文化財の宝庫と折紙を付けられて以来その調査に努力していたところでありますが，丁度県営の圃場整備事業と合致したため，島根県益田農林事務所の御協力のもとに第３年次調査の報告のまとめが出来たものであります。本年度は特に周知の遺跡を含む地区である一方圃場整備事業費の延びとで，対前年50％の調査費増により調査員や関係者各位に過重なる労苦をおかけしたことを申し訳なく思っております。

本年度調査は前年に続いて大字紙祖地域における周知の遺跡範囲確認を含む２地点の分布調査（平成２年度要本格調査）元組地区長グロ遺跡と，荒木地区水田ノ上遺跡に加えて大字匹見地域の江田地区平田遺跡，萩原地区（黒和）の先ハズミ遺跡と植地地区土井分遺跡の３地点について分布調査を実施したものであります。前期紙祖の２地点については，長グロ遺跡４坑（２ｍ×２ｍ）の16㎡の調査で土師器，須恵器が330点も出土，水田ノ上遺跡にいたっては３坑（２ｍ×２ｍ）で縄文後晩期とみられる遺物が340点出土に加え柱穴と見られる遺構も発見せられ平成２年度における本格調査は必至と思われます。

大字匹見地域における３地点については江田地区の平田遺跡４坑16㎡に土師器等が30点出土，萩原地区先ハズミ遺跡では４坑で弥生土器片等が25点出土，植地地区土井分遺跡でも４坑16㎡で土師器と須恵器等が50点出土と発掘されていますが，紙祖地域のものに比べると規模が小さいが平成２年度で予定している周知の遺跡分布調査において当町が行う圃場整備事業に係る遺跡の全容が明確になると考えられます。

いずれにしても平成３年度本格調査に係る発掘作業において匹見町の古代史に答えの出る年であろうと思うとき大きな期待を持つものです。この事業の遂行にあたっては関係各位の御協力はもとより，県教育庁文化課の諸先輩，島根大学文学部の諸先生方には，今までも含めたより強力なる御指導と御協力を賜わることになると存じますので御礼に併せてお願いを申し上げる次第です。

最後になりましたが，第３次調査にあたり指導助言を頂きました本書に記名されております調査指導陣の各位，調査担当者他作業従事者各位に深甚なる謝意を表し発刊の言葉といたします。

平成２年３月

匹見町教育委員会

教育長　平　谷　　勉

例　　言

1．本書は，平成元年度国庫補助事業として，匹見町教育委員会が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2．調査は，島根大学歴史学教室及び島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根大学法文学部教授	田中　義昭
	島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第１係長	宮沢　明久
	島根県教育委員会文化課文化財保護主事	内田　律雄
	島根県教育委員会文化課主事	鳥谷　芳雄
事務局	匹見町教育委員会教育長	平谷　　勉
	匹見町教育委員会教育次長	渡辺　　隆
	匹見町教育委員会派遣社会教育主事	田原　敏明
調査担当者	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺友千代
調査補助員	渡辺登美子	
調査参加者	栗田　定，森　清，原田禎二，森脇雅夫，落田政人，栗田　修，渡辺　照，斉藤直行，森　英雄，藤井富子，石原八重子，山崎リマヨ，中村靖子，西川和代，斉藤百合子，森脇一枝	

3．発掘調査に際しては，土地所有者をはじめ地元の方々に終始多大な協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

4．今回の調査では，土坑状態遺構―SK，溝状遺構―SD，柱穴状遺構―Pと略号し，調査地点名は遺物・遺構の検出有無にかかわらず，全て「○○地点」として統一した。また挙数に伴って，図版においては無遺調査区を中心に省略したものもあるので了承願いたい。

5．本書の掲載図面は，渡辺友千代・渡辺登美子・藤井富子が分担し，執筆は調査員，事務局が行い（執筆者名は目次および各項末尾に記す），編集は内田律雄・松本岩雄の指導のもとに渡辺友千代が行った。

目　　次

第１章　今までの経過 ---------- （渡辺　　隆） ---------- 1

第２章　匹見民俗的管見 ---------- （渡辺友千代） ---------- 2

第３章　長グロ調査地点 ---------- （渡辺友千代） ---------- 8

１．はじめに ---------- 8

２．調査の概要 ---------- 8

３．調査区の概要 ---------- 8

４．出土遺物 ---------- 12

第４章　水田ノ上調査地点 ---------- （渡辺友千代） ---------- 17

１．はじめに ---------- 17

２．調査の概要 ---------- 17

３．調査区の概要 ---------- 17

４．出土遺物 ---------- 20

第５章　平田調査地点 ---------- （渡辺友千代） ---------- 27

１．はじめに ---------- 27

２．調査の概要 ---------- 27

３．調査区の概要 ---------- 27

４．出土遺物 ---------- 30

第６章　土井分調査地点 ---------- （渡辺友千代） ---------- 35

１．はじめに ---------- 35

２．調査の概要 ---------- 35

３．調査区の概要 ---------- 35

４．出土遺物 ---------- 38

第７章　先ハズミ調査地点 ---------- （渡辺友千代） ---------- 43

１．はじめに ---------- 43

２．調査の概要 ---------- 43

３．調査区の概要 ---------- 43

４．出土遺物 ---------- 46

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　匹見のおもな遺跡 …… 3～4
第３図　調査地点位置図 …… 6
第４図　長グロ地点配置図 …… 9
第５図　長グロ地点土層断面図Ⅰ …… 10
第６図　長グロ地点土層断面図Ⅱ …… 11
第７図　長グロ地点土器・石器実測図 …… 12
第８図　水田ノ上地点配置図 …… 18
第９図　水田ノ上地点土層断面図Ⅰ …… 19
第10図　水田ノ上地点土層断面図Ⅱ …… 20
第11図　水田ノ上地点土器・石器実測図Ⅰ …… 22
第12図　水田ノ上地点石器実測図Ⅱ …… 23
第13図　平田地点配置図 …… 28
第14図　平田地点土層断面図 …… 29
第15図　平田地点土器・石器実測図 …… 31
第16図　土井分地点配置図 …… 36
第17図　土井分地点土層断面図 …… 37
第18図　土井分地点土器・石器実測図 …… 40
第19図　先ハズミ地点配置図 …… 44
第20図　先ハズミ地点土層断面図 …… 45
第21図　先ハズミ地点土器・石器実測図 …… 47

写　真　目　次

1．七村往環道から匹見中央を遠望（南西から）
2．地点近景（西から）
3．３層面に露頭する河床礫（南壁から）
4．遺物出土状況（Ｃ区）
5．長グロ地点出土遺物
6．水田ノ上調査地点近景（南西から）
7．Ｂ区北壁と検出されたP01・P02の状況
8．水田ノ上地点の出土遺物
9．排水溝から出土した石斧
10．平田調査地点近景（北から）
11．Ｂ区北壁状況
12．Ｃ区北壁状況
13．平田調査地点出土遺物
14．銭貨出土状況
15．土井分調査地点近景（北西から）
16．Ｃ区北壁状況
17．Ｄ区北壁状況
18．土井分調査地点出土遺物
19．先ハズミ地点遠景（南東から）
20．Ｂ区北壁状況
21．Ｄ区南壁状況
22．先ハズミ地点出土遺物

第1章　今までの経過

昭和62年度から始まった県営圃場整備事業に伴い，国庫補助事業として進められている「匹見町内遺跡詳細分布調査」は，本年度で3年目ということになる。本事業は来年度まで継続される予定であるが，一応ここでその経過を概略しておきたいと思う。

昭和62年度に行われた本事業は，島根大学の田中義昭教授および同大学歴史学教室の学生諸氏らによって，圃場整備に先立ち匹見町大字紙祖地内を中心に調査が行われた。

該当調査は，家廻り遺跡・石ケ坪遺跡・木戸開中遺跡・E地点を名称とした4地点であった。そのうち家廻り遺跡では，2mの方形区5坑，調査面積20m²が行われ，少量であったが縄文晩期と想定される遺物が出土している。その後，本遺跡は圃場整備に関連して水路敷設に伴い，一部本格調査がなされた。また，石ケ坪遺跡では周知の地点50m北西側で，2mの方形区8坑・調査面積32m²が確認調査された。その調査では，周知遺跡とは時期的に異にする。つまり縄文晩期のもののほか数点出土している。さらに木戸開中遺跡では，土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器・石器・木器等が湿地立地から出土した。なお小原川・七村川の合流地にあたるE地点では遺物や遺構は検出されていないという。

昭和63年度は島根大学生の赤坂二史氏と，匹見町嘱託員である渡辺友千代・文化財保護専門員が残りの匹見町大字紙祖地内を担当した。それは上ノ田・前田・前田道ノ下・善正町・曽利田・前田尻・下正ノ田・早苗口頭・小深上ノ切・石ケ坪・道ワテ尻の各地点の11箇所であった。その分布調査で包含層が確認されたものは前田・善正町・前田尻・下正ノ田・石ケ坪の5地点であって圃場整備で掘削が必要と認められた前田遺跡は同年度に本格調査を完了させた。また石ケ坪・下正ノ田の2地点は次年度（平成元年度）の調査とし，残りの3地点は盛土によって保存とした。

平成元年度（本年度）は，長グロ・水田ノ上・平田・土井分・先ハズミの5地点を調査し，いずれの地点とも遺物あるいは遺構が検出されており，その調査結果が本書である。

こうして貴重な文化遺産が次々と発見されている現状下で，どう保護・どう対応するか，色々な課題が山積しているが，前向きに進めていかなければならない問題であることは確かである。

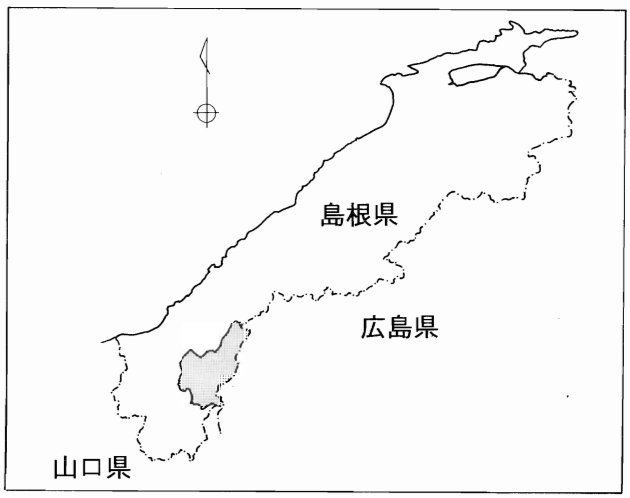
（渡辺　隆）

第2章　匹見民俗的管見

「ひきみ」という語源について『石見匹見町史』中，藤井宗雄著の『郷名考』に，……山田郷比売森八幡宮とありて，比売は匹見（ヒミ）の転にやあらむ。……とある。また『角川日本地名大辞典』32「島根県」には（町名の由来）檜木見に由来する，ともある。一方『日本地名基礎辞典』[1]には，日置（ひき）と同語とし，古代部制地名か，日奉（ひまつり）部，日紀（ひほぎ）部か，などを掲げている。さらに『地名の語源』[2]には，「日置（ヒキ）」とあり，そのヒオキは日置部の居住地とし，西南日本に分布，とある。またヒキは，低い，とも。一説にキ族という低地の南方人，という説もあるらしい。

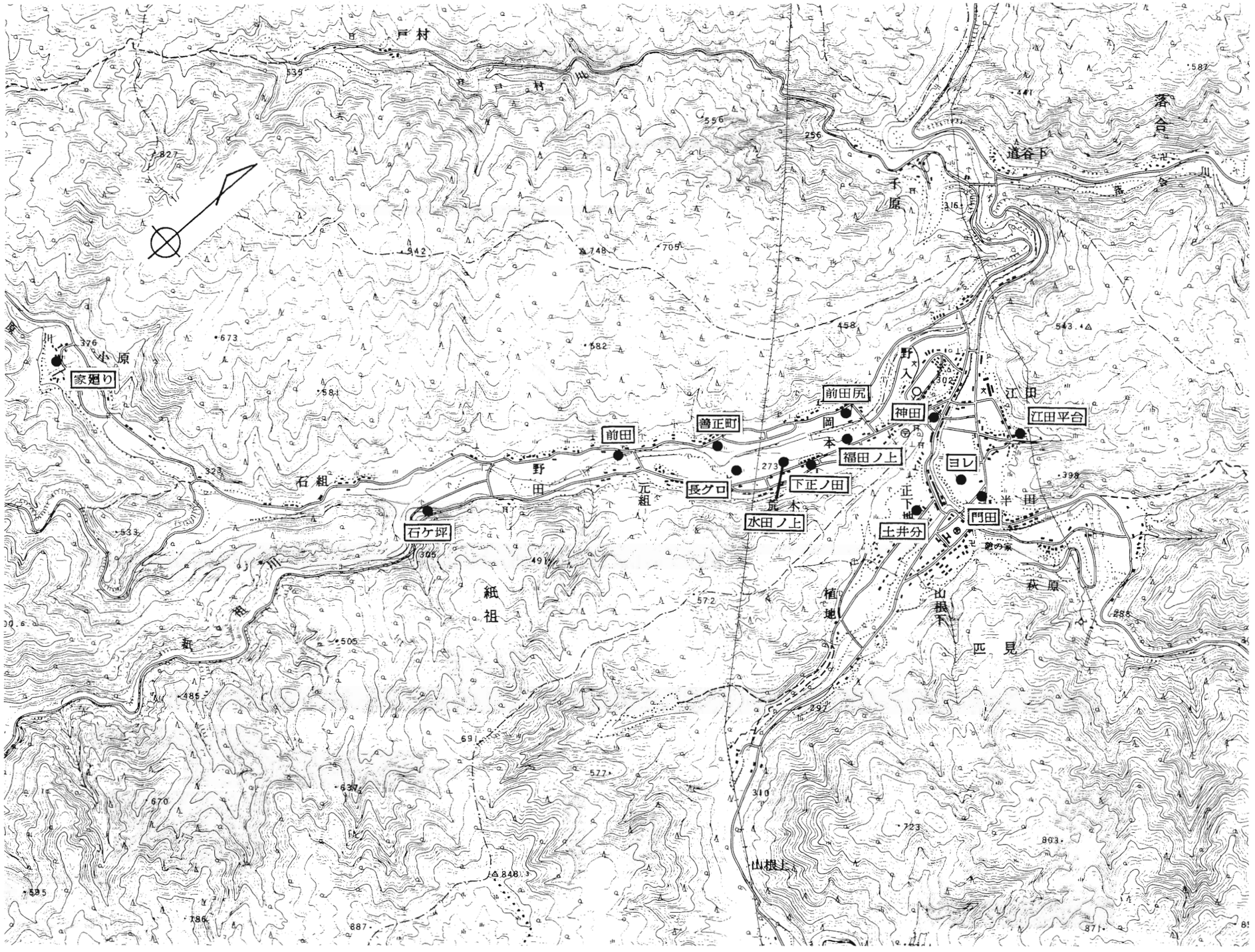
後者のものを要約すると，凡そ「低い」ということになるが，中国脊梁山地の山懐に存在する匹見が低いという語源に基づくとは腑に落ちないであろう。しかし発音的転訛からみれば，最も近いかも知れない。例えば，戸村（とむら）をトムレという人がいるように，これはラ行の転訛であり，また本来，酒屋（さけや）をカ行の転訛からサカヤというのと同じことである。つまりヒキミとは，カ行の転訛によって，その語源は「低見」（ヒクミ）によるものではないだろうか。さらに尾語の「ミ」は地に通じるもので，石見→岩地あるいは広見→平地であり，したがってヒキミは，低見→低地ということになる。

匹見の語源を発音的転訛から解けたとしても，地形的立地からみれば，まったく逆である。しかし往古おいて，匹見に至る「通路」に視点をおいて観てゆくならば「低地」がみえてくるように思える。



第1図　遺跡の位置

匹見における最も古い通路（交流路）は，広島県と脊梁（五里山）を成し塩道でもあったオザカエ（御境）を通る南東－北西コースであった。このコースが太古から使われていたらしいことは，匹見における数々の縄文遺跡が語っている。例えば，石器の材料は，冠山（広島県）産のサヌカイトであり，また黒曜石の98％は乳白色の姫島（大分県）産で占められてい



第２図　匹見のおもな遺跡

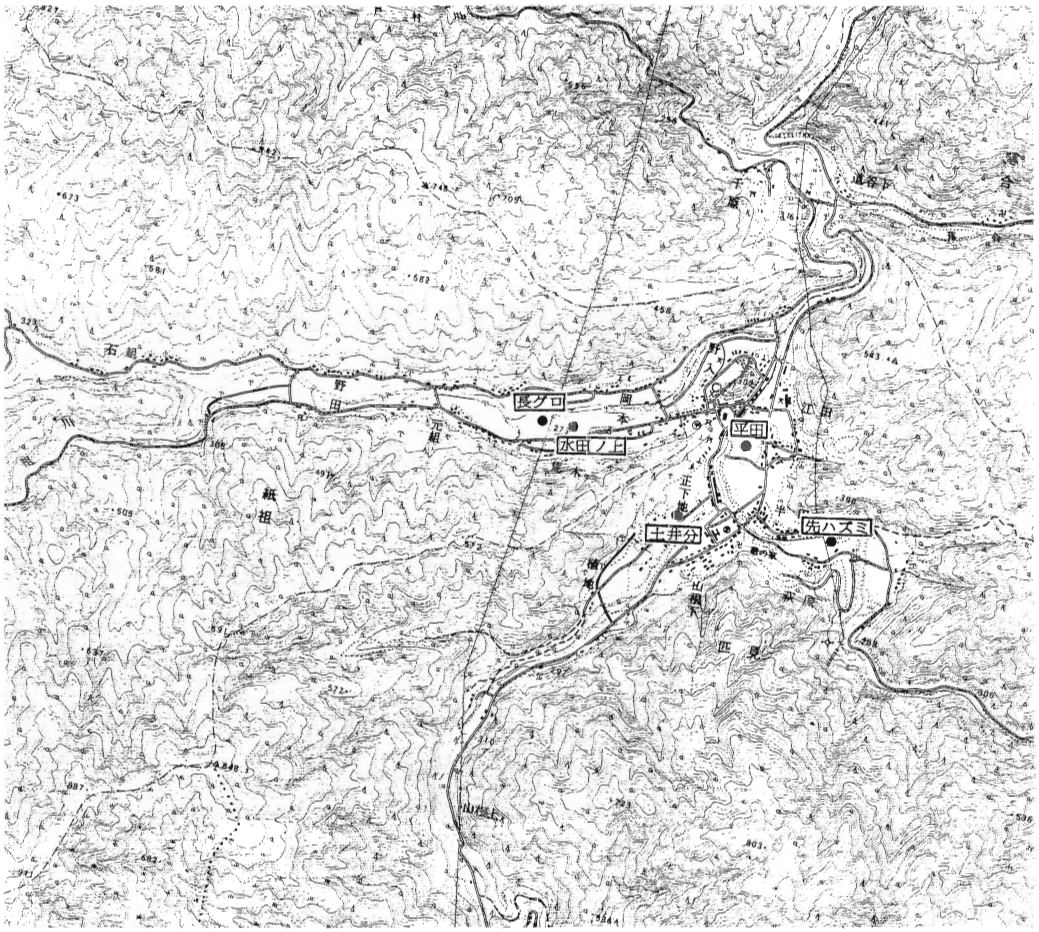
るのである。また土器形式では，山陽や九州を標式するものであって，山陰側の形式は皆無であることが如実に物語っているのである。したがって彼ら達が険阻な脊梁山地を山陽から越えたならば，眼下に広がる狭長な谷間も多分に広見（島根県美濃郡匹見町大字匹見字広見・広島県境に立地する山村）に見えたに違いなく，またさらに下れば，匹見も低地に見えたであろう。このように旧くは，その通路は河筋ではなく，もっぱら尾根筋ルートが優先されていたのである。

第1表　匹見の原始・古代遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	種別	時代等	No	遺跡名	所在地	種別	時代等
1	新槇原遺跡	匹見町大字道川字出合原	散布地	先土器 縄文	18	前田遺跡	大字紙祖字野田	散布地	縄文・弥生 古墳
2	土家屋遺跡	大字道川字下道川	散布地	縄文(町指定)	19	善正町遺跡	大字紙祖字岡本	散布地	古墳 奈良・平安
3	江田古墳群	大字匹見字江田	古墳群	横穴式石室 (町指定)	20	前田尻遺跡	大字紙祖字岡本	集落跡	縄文
4	江田平台遺跡	大字匹見字江田	集落跡	弥生	21	野入古墳	大字匹見字野入	古墳	
5	塚田遺跡	大字匹見字江田	散布地	古墳	22	神田遺跡	大字匹見字野入	散布地	縄文 (町指定)
6	ヨレ遺跡	大字匹見字半田	集落	縄文・弥生 古墳・奈良	23	能入遺跡	大字匹見字荒木	散布地	古墳
7	半田遺跡 イセ地区	大字匹見字半田	散布地	古墳・奈良	24	猿地遺跡	大字紙祖字荒木	散布地	弥生・古墳 奈良
	サイカチ地区	大字匹見字半田	散布地	弥生・古墳 奈良	25	福田ノ上遺跡	大字紙祖字荒木福田ノ上	集落跡	縄文・弥生
	八祖地区	大字匹見字半田	散布地	古墳・奈良	26	下正ノ田遺跡	大字紙祖字荒木	散布地	縄文・弥生 古墳・奈良・平安
	美濃殿地区	大字匹見字半田	散布地	縄文	27	水田ノ上地区	大字紙祖字荒木水田ノ上	集落跡	縄文・弥生
	辰美屋地区	大字匹見字半田	散布地	縄文・弥生 古墳・奈良		槍田地区	大字紙祖字荒木槍田	散布地	縄文・弥生 奈良
	家ノ後地区	大字匹見字半田	散布地	弥生・古墳 奈良		木戸開中地区	大字紙祖字荒木木戸開中	散布地	縄文・弥生 古墳・奈良
	木ワダ畑地区	大字匹見字半田	散布地	弥生・奈良	28	**水田ノ上A遺跡**	大字紙祖字荒木公文給	集落跡	縄文・弥生 奈良
8	上黒和遺跡	大字匹見字黒和	散布地	弥生	29	**長グロ遺跡**	**大字紙祖字元組長グロ**	**散布地**	**奈良**
9	**先ハズミ遺跡**	大字匹見字黒和	散布地	縄文・弥生 奈良	30	**石ヶ坪遺跡**	大字紙祖字乙佐原	集落跡	縄文
10	川原田遺跡	大字匹見字山根上	散布地	縄文	31	家廻り遺跡	大字紙祖字小原	散布地	縄文・弥生
11	和田古墳	大字匹見字山根上	古墳	横穴式石室 (町指定)	32	新井屋畑遺跡	大字紙祖字三葛	散布地	奈良・平安
12	永長山古墳群	大字匹見字山根上	古墳	横穴式石室	33	牛首古墳	大字石谷字内石牛首	古墳	横穴式石室 (町指定)
13	越峠遺跡	大字匹見字越峠	石斧	弥生	34	土井田遺跡	大字石谷字内石土井田	散布地	縄文
14	サノクチ遺跡	大字匹見字植地	散布地	古墳・奈良	35	新宅遺跡	大字石谷字内石	散布地	奈良・平安
15	**土井分遺跡**	大字匹見字植地	集落跡	奈良	36	新井屋畑遺跡	大字紙祖字三葛	散布地	奈良・平安
16	松田原遺跡	大字匹見字植地	散布地	弥生	37	森谷遺跡	大字紙祖字三葛	銅鏡	平安
17	**平田遺跡**	大字匹見字黒和	散布地	縄文・弥生 奈良	38	コンボリ遺跡	大字澄川字能登	散布地	尖頭器出土 推定地

時を経て，その交流は行政的制度の中から次第に脊梁山地は境山，また河川は境川としての色彩を強め，その通路は日本海側の北方に徐々に振り向けられていったのであった。それは紙祖地区でいう三坂谷（御坂谷）であり，落合地区では三坂峠（御坂峠）などが通路であって，つまり南東への通路から北東－南西（脊梁方向）ルートへの変更であったのである。

そのことは匹見南西部に分布する河内信仰（河内神社）から窺い知ることができる。その河内信仰は，水田地の拓ける谷間の奥部，つまり水源に祀られることが多く，その立地性から水神的色彩が強い神として，さらにその水神信仰は稲作と結び付いたのであった。特にこの河内信仰は，山口県の東部に濃厚に分布するものであることから，したがって河内神社は南西からの移植文化である，とも位置付けられるものである。そういえば，稲作を基調とした該地の弥生文化・土器形式でいうのならば，山口県北東地方と類似した要素を見い出すことができるのも，そういった文化の接近から育まれたのかも知れないのである。また一方，匹見の南東部に

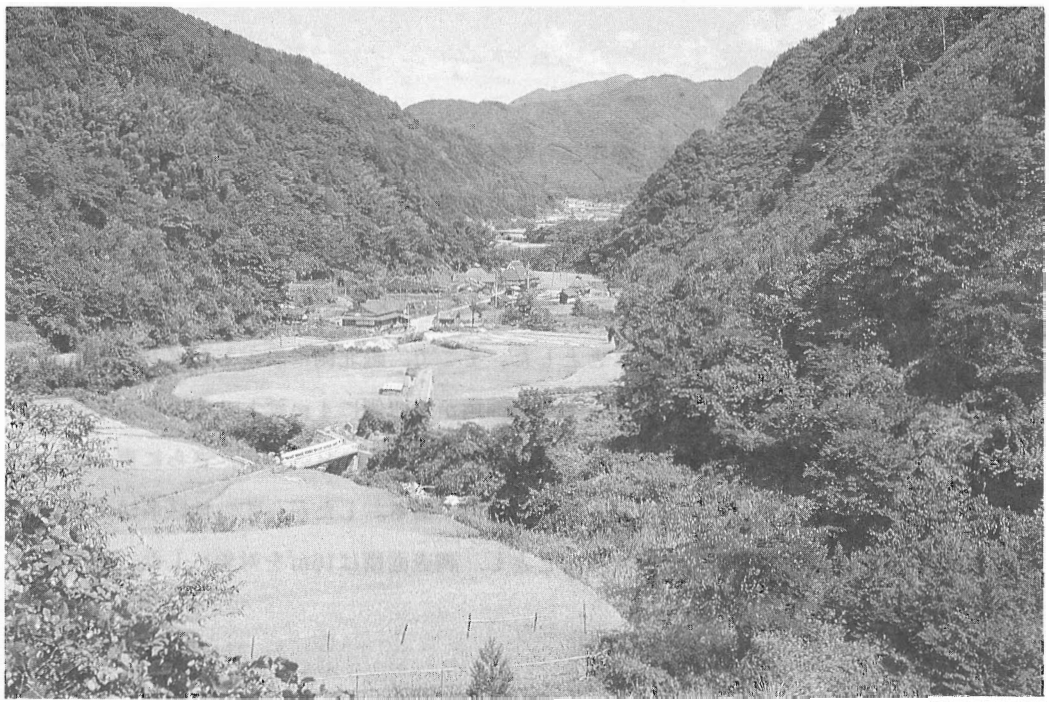


第３図　調査地点位置図

は大元信仰が分布しており，その原初は山に鎮まる祖霊信仰に根ざしたものといわれている。今でも邑智郡を中心とした地域に濃厚に遺っており，したがって大元信仰は大元神楽などの北東文化の流布からも紐解けるのである。

またこのルートは，殊に蕃制期には浜田表への往環として，落合地区の三坂峠は特に重要視されていたし，さらにその通路は北方に，北方にと向けられ，平山越，そして秋冷ルートへと移行していったのである。しかしこれらのいずれの尾根伝いの古道から見る（至る）匹見の地は，やはり視覚的に低見（低地）であったのに変りはなかったのである。そして現在の北西コース（高津川沿）である河筋ルートは，昭和10年代に拓かれたものであって，もっとも新しいルートなのである。

このように四周を山々に囲まれた匹見（低見）をみると，原始では「回帰的定着」の縄文人が，また中世には平家の落人の「隠れ里」として，さらに近世には鈩師・木地師の「漂泊」の民などが，たえず“森”を意識し，往来した地域だったことが判るのである。



1．七村往環道から匹見中央を遠望（南西から）

第3章　長グロ調査地点

1．はじめに

長グロ調査地点は，匹見町大字紙祖字元組に所在する。本地点は，北東－南西に走る顕著な断層谷にあって，その断層谷に沿って流下する紙祖川がもたらした堆積平地の右岸に立地する。その地点の南西300ｍには，紙祖川には北西西に沿って周流しているため，北東面は幅をもった帯状の河岸段丘が延びている（写真２）。

そうした良好な地形・地性から，古くから人々が住み着いたらしく，北東200ｍ地点には縄文後晩期の水田ノ上遺跡・槍田遺跡，その300ｍ地点には土師器・須恵器を多出した下正ノ田遺跡，また弥生前期を出土する木戸開中遺跡などの遺跡が集中点在している（第２図，第１表）。

調査は，平成元年４月11日から26日の間うち延べ７日，37人役を要し，２ｍ×２ｍの方形区４坑，16㎡を実施した。

2．調査の概要

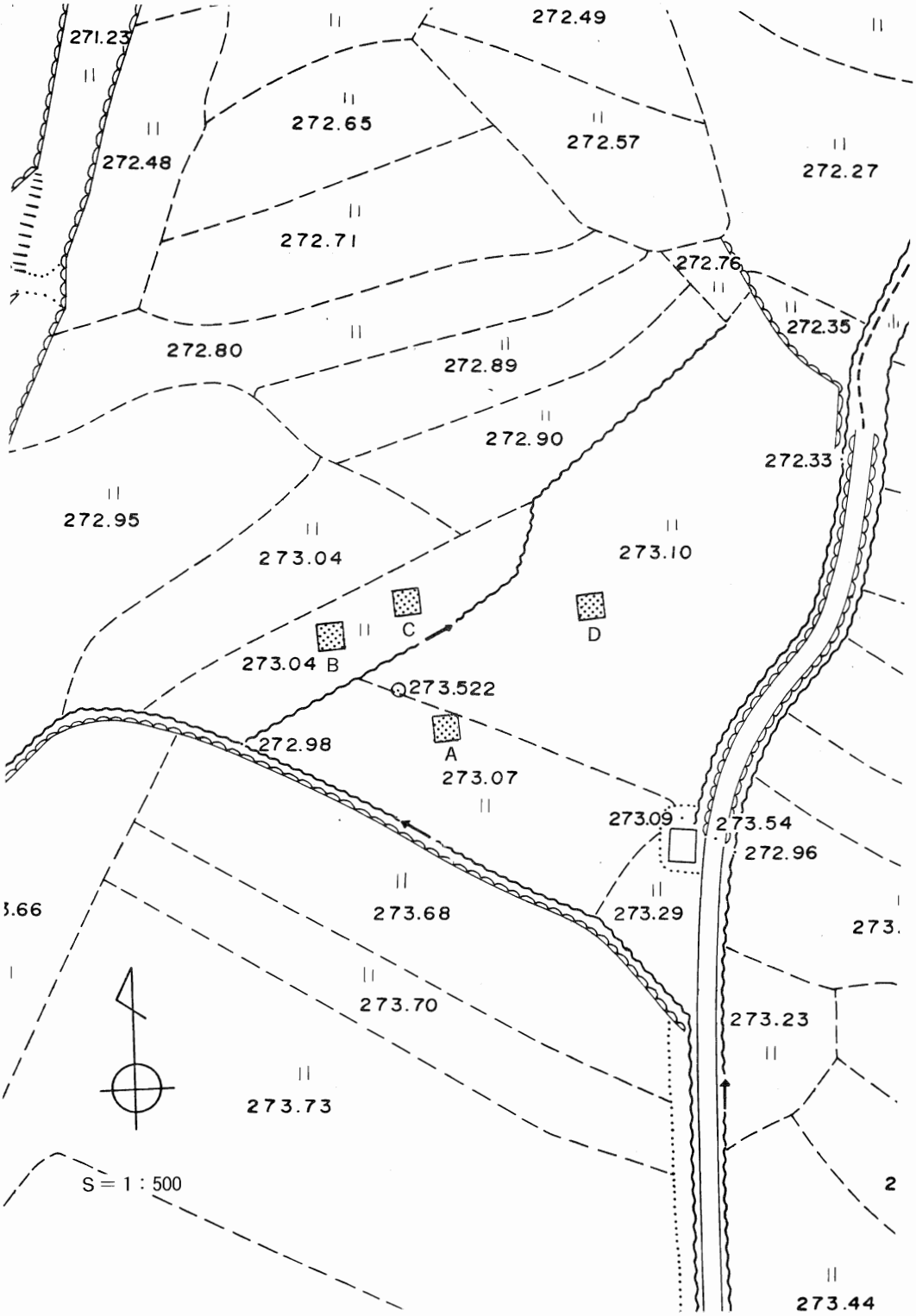
標高約273.07ｍ測る調査地点は，先年から畦畔等に遺物の散布が確認されていたため，範囲の限定は容易かった。そこで測量起点となる基点坑を，そのほぼ中央に任意に設定することにした。その基点から，磁北に向って４ｍ地点に２ｍ×２ｍの方形区を設定。さらに，その方形区の南東角から，南に６ｍ下った地区にＡ区と称する２ｍ×２ｍの方形区を東寄りに設定した。

掘削は，まずその２坑から始めることとした。そこで，磁北側に設定したグリッドの３層上面に遺物の多出をみたので，そのグリッドの南西角から西側に４ｍ延し，その地点の南西寄りに２ｍ×２ｍの方形区Ｂ区と称するグリッドを設定した。そのＢ区から，さらに東へ８ｍの地点にＤ区と称する２ｍ×２ｍのグリッド設定したのである。したがって，地区名はＡ区を中心に，右廻りにＢ区，Ｃ区，Ｄ区と称することとし，調査面積は16㎡を対象にした（第４図）。

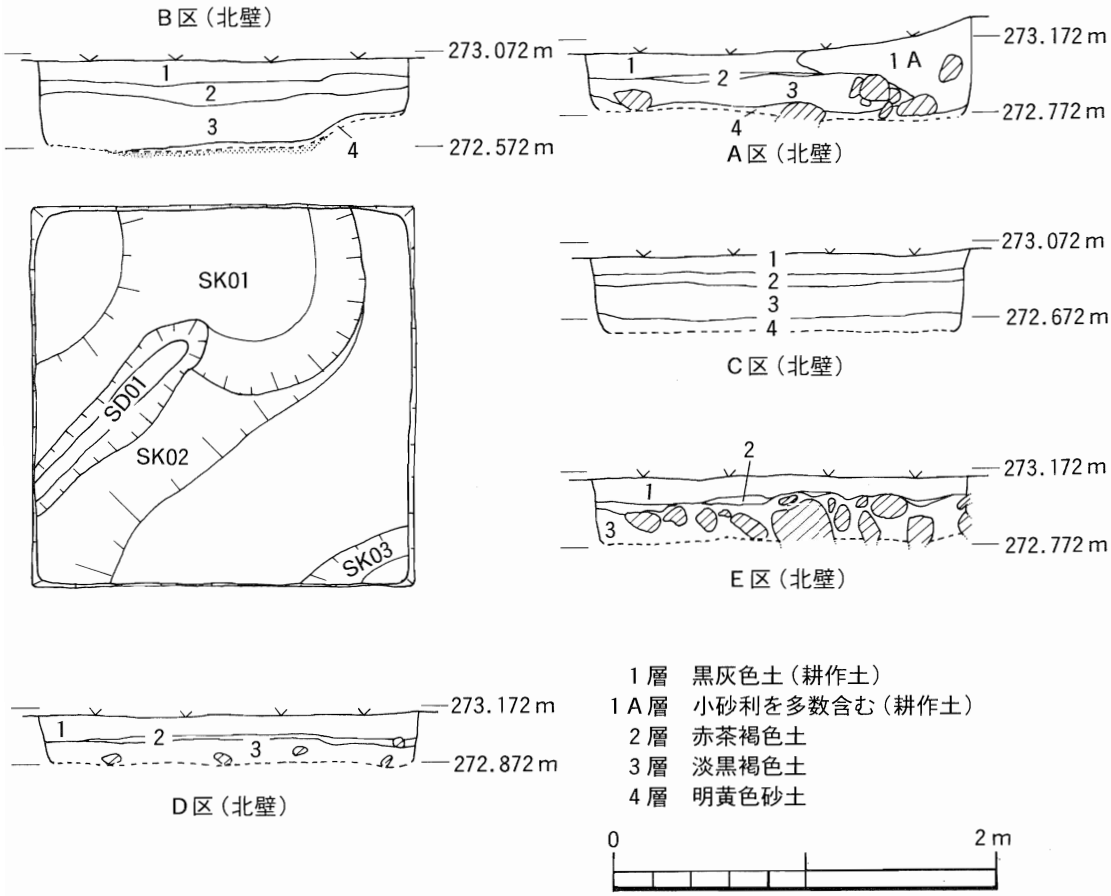
3．調査区の概要

Ａ区（第５図）　現地標高273.07ｍ測るＡ区は調査区域の那珂で南端に位置するグリッドである。

耕作土は概　12㎝であるが，北東角を畦畔が対行しているため，約10㎝盛り上がっている。しかもその黒灰色土の耕作土（砂粒を含む）は，下層の２層・３層にかけて極部的に嵌入し，



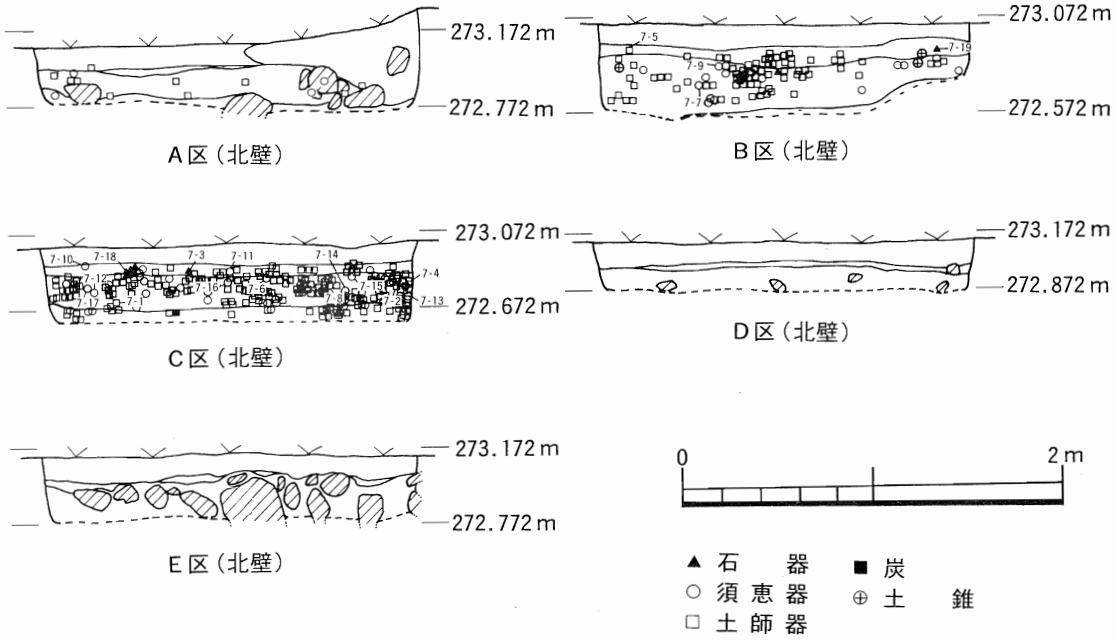
第４図　長グロ地点配置図



第5図　長グロ地点土層断面図Ⅰ

撹乱している。2層は砂粒を含む赤褐色土（酸化鉄のため）。厚い部分で3cm測るが，下層の円礫群のためか，尖滅した部分が多い。3層は，粘性のある淡黒褐色土で，本遺跡の遺物包含層である。この包含層は，南東面に向って4層との層界が約14cm傾低しており，土師器8点，須恵器3点が出土した。4層は砂礫を含む明黄砂土で，基盤層である。

B区（第5図）　B区は現地標高約273.04mを測る。1層は耕作土で，層厚は8～14cm測り，2層との層界は緩曲線を描く。2層は酸化鉄のため赤茶褐色を呈し，5㎜大の砂粒を含む客土である。層厚は3～10cm測り，とくに北壁寄りは散つく。3層は砂質性の淡黒褐色土で，上位面はやや粘性を滞びる。本層からは全体の80％を占める土師器を中心に，須恵器・土錘等が上位面に多く出土した。また下層面には，約22cmの深さをもつ溝状土坑（SK01），それに沿うように幅12～15cm，深さ約9cmを測る溝状のものが部分的に並列して西面に貫入するものが確認されている（SD01）。さらに南東隅には深さ約7cm測るSK03の陥ち込みが認められる（第5図）。



第６図　長グロ地点土層断面図Ⅱ

これらの“陥ち込み”が人為によるものかについては判らないが，遺物がその構内の上面，しかも希薄であって，その形状が溝状を呈しているため恐らく伏流水等による自然痕跡のものであろう。４層は砂礫を含む明黄色砂土で，遺物はなかった。

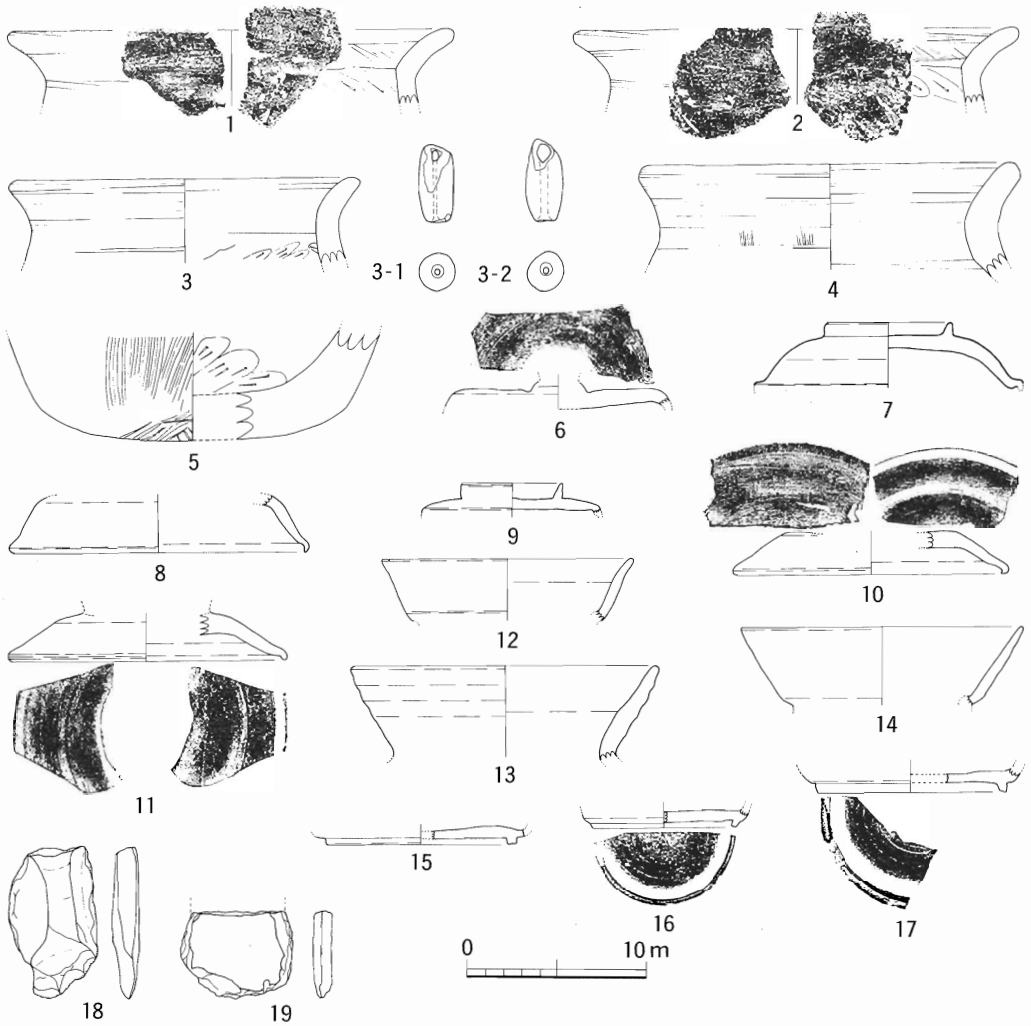
Ｃ区（第５図）　Ｂ区と同レベルのＣ区は，現地標高273.04を測る。１層は黒灰色した耕作土で，層厚は10～14cm測り，北東流する紙祖川の北西面に斜低する。２層の客土は３～４cm測り，ほぼ水平である。３層は淡黒褐色土で，上位面は粘性が強く，全体的に砂質性であった。層厚はおよそ20cmを測り，ほぼ水平に堆積する。遺物は上位面では土師器を中心に，全面に散在する状況を示していたが，中位面から次第その分布は東面側に遍在して出土している。遺構らしきものは検出されなかった。４層は２～５cmの砂礫を含む明黄色砂土。遺物はない。

Ｄ区（第５図・写真３）　現地標高約273.10cm測るＤ区は，調査区域の東面にあたり，他の調査区に比べて30～60cm高い。１層の耕作土は10～14cm測り，僅かに東面（山裾側）に斜低し，２層の客土も西面は全体に薄く，部分的には尖滅する。次の３段目の層は，10cmの円礫を含む砂礫層で，実質的には河床礫にあたる。本調査では，いずれの層にも遺物・遺構は確認されなかった。

4．出　土　遺　物

本拠点では，土師器312点・須恵器57点，石器剝片７点・打製石斧１点・土錘３点・陶磁器１点・炭１点の計382点が出土した。そのうちＡ区は，土師器９点・須恵器４点・Ｂ区からは土師器80点・須恵器14点・土錘３点，打製石斧・剝片各１点，Ｃ区からは土師器223点・須恵器93点・石器剝片６点・陶磁器１点・炭１点であった（第６図）。以下，これらの遺物のうちから特徴的なものを抽出し，観ていくことにする。

出土遺物（第７図・写真４）　１は，Ｃ区の３層下位に出土した土師器。「く」の字に折れ曲り，外面・口縁内面をハケ目調整する。内面頚部はヘラ調整。外面は淡赤色を呈すが，内面



第７図　長グロ地点土器・石器実測図

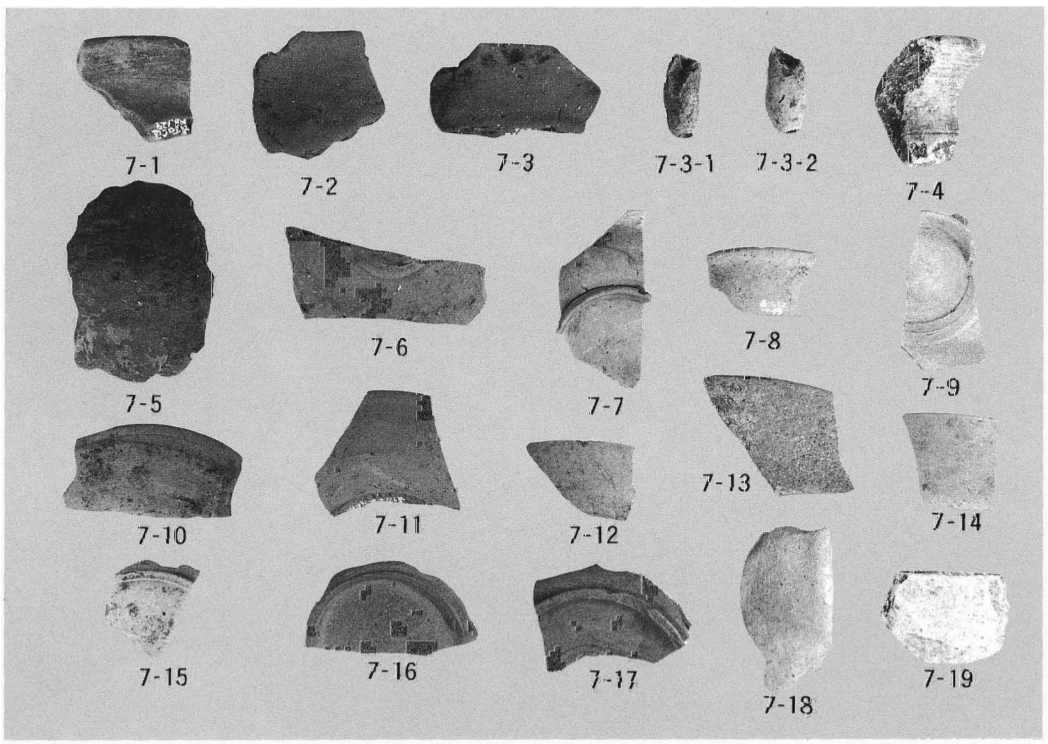
は黄灰色。２は内外とも淡赤色した土師器で，手法は１と同じ。３－１・３－２はＢ区から出土した土錘で，そのうち３－１は長さ4.3cm，径は２cmを測る。色調は淡茶色で，３－２は白灰色を呈し，精緻である。５は，丸底の低部で，外面をハケ目調整し，内面をヘラ削り。内外とも赤茶橙を呈し，胎土に２～３㎜第の砂粒を含む。６は，Ｃ区３層上位に出土した須恵蓋。天井部外面をヘラ削りし，内面は外縁にむけて横ナデとする。つまみは輪状とみられ，青灰色を呈する。７は須恵蓋。内外ともヘラ削りの後，横ナデ。体部は，内湾しながら口縁部に至るが，その端部で外反しアクセントをもつ。色調は風化のためか，外面は灰色を呈すが，内面は白灰色。10は須恵蓋。内外とも横ナデで，天井部外面を肥厚させる。色調は淡青灰色を呈し，胎土は緻密で焼成は良好である。12は須恵坏。体部は外傾して立ち上がり，端部はやや外反する。内外とも横ナデで，灰色を呈する。胎土は緻密である。13は須恵長頸部。外面はヘラ削りの後，横ナデとし，ヘラ削りの凹凸が顕著である。内面は横ナデで，内外に灰粕が施され，光沢の青灰色を呈する。14は須恵坏。内外とも精緻な横ナデで，外傾して立ち上がり，口縁部は大きく開く。外面は淡青灰色で，内面は灰色を呈し，胎土は精緻である。15は須恵坏の底部。底部外面は回転糸切りで，内面は横ナデであるが，僅かに不定方向のナデが認められる。胎土は緻密である。16は須恵長頸壷の底部か。外面底部の切り離しはヘラ切りで，後に横ナデ。内面は横ナデの後，不定方向のナデ仕上げ。色調は外面青灰色，内面は淡青灰色を呈し，胎土は精緻である。17は須恵坏。高台面を肥厚させ，その端部の外縁がつき出す。切り離しは回転糸切りで，後に横ナデ。内面は横ナデの後，不定方向にナデ仕上げする。

18は，２層・３層の層界に出土した石器。石材は安山岩で，風化のため，灰色を呈する。粗く成形した後，周縁部を二次的に剝離調整を施す。共伴遺物とはみられず，至近の縄文遺跡の転移物であろう。19は，折損した打製石斧の刃部。背面に原面が残り，その周縁を数次に剝離調整を施している。表面は風化のため，白灰色を呈し，石材は安山岩。

2．地点近景（西から）

3．3層面に露頭する河床礫（南壁から）

4．遺物出土状況（C区）



5．長グロ地点出土遺物

第4章　水田ノ上地点

1．はじめに

水田ノ上地点は，匹見町大字紙祖字荒木に所在する。その地点は，北東流する紙祖川が形成した河岸段丘上の右岸に立地し，周辺は水田地が拓けている（第８図，写真６）。

また至近の200m南西には，前章の長グロ遺跡があり，北東200m地点には縄文晩期から弥生前期に至る遺物が出土した木戸開中遺跡，さらに300m東北東には縄文から奈良平安に至る複合遺跡である下正ノ田遺跡などが点在している。

1983年に発掘調査が行われた地点は，本地点の20m東にあたり，今回の確認調査は，その広がりを把握するために行われたものである。調査は平成元年10月28日から11月４日までのうち，３日を費して行った。

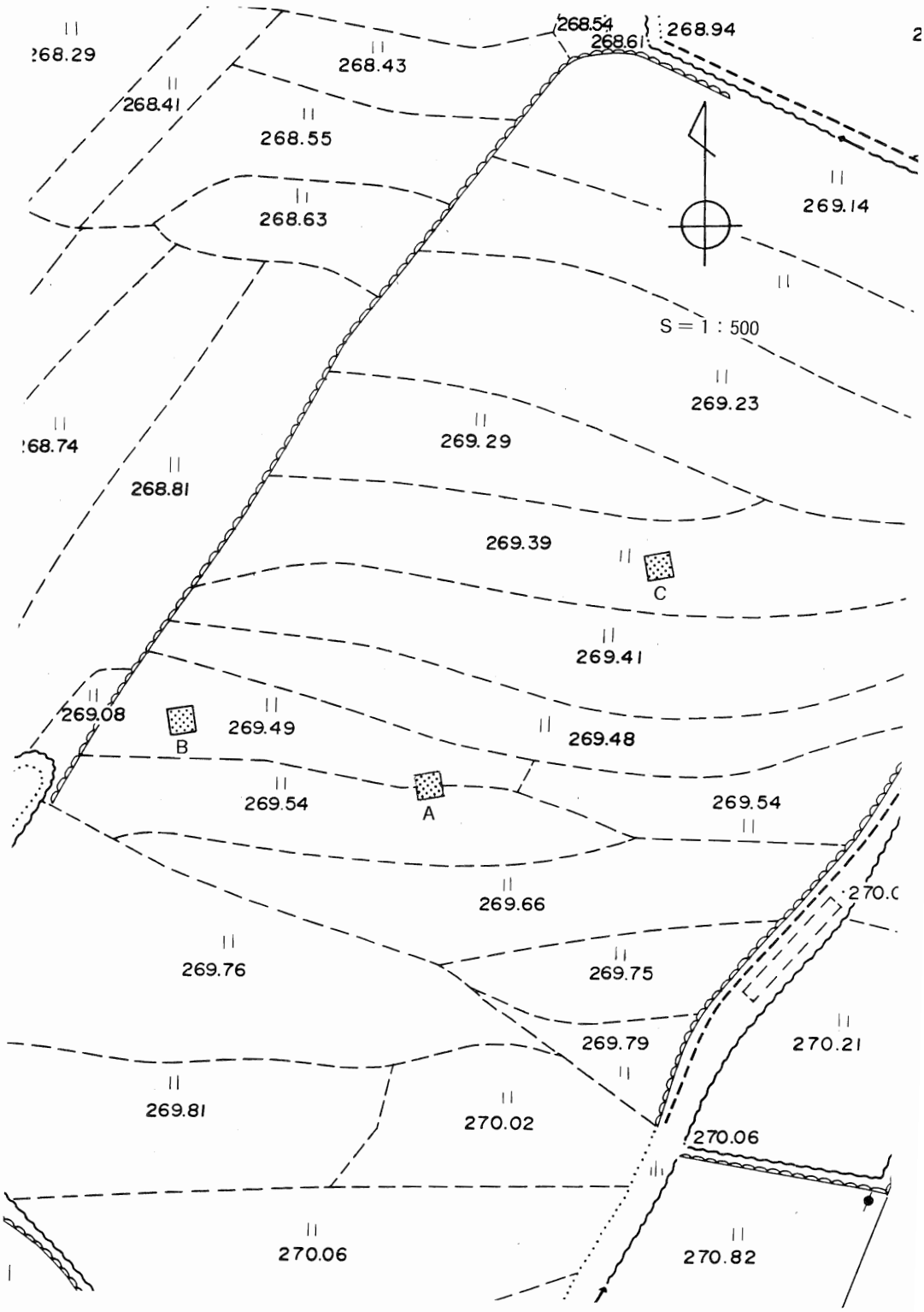
2．調査の概要

本地点の現地標高は，269.39m～269.54mを測る。調査は，基点なる地点を調査域の上側に任意に設定することから始めた。その基点から西に８m延ばした地点にまずA区と称する２m×２mの調査区を設定した。そして，設定したA区から18m西（紙祖川側）に延長し，そこから石垣を設け80cm下がる地点の手前に調査区を設定するため，さらに磁北方向に６m振り，その地点にB区と称する２m×２mの調査区を設けた。C区は東区東面の状況を把握するため，基点より磁北方向に14m測った地点に２m×２mの調査区を設けることとした。

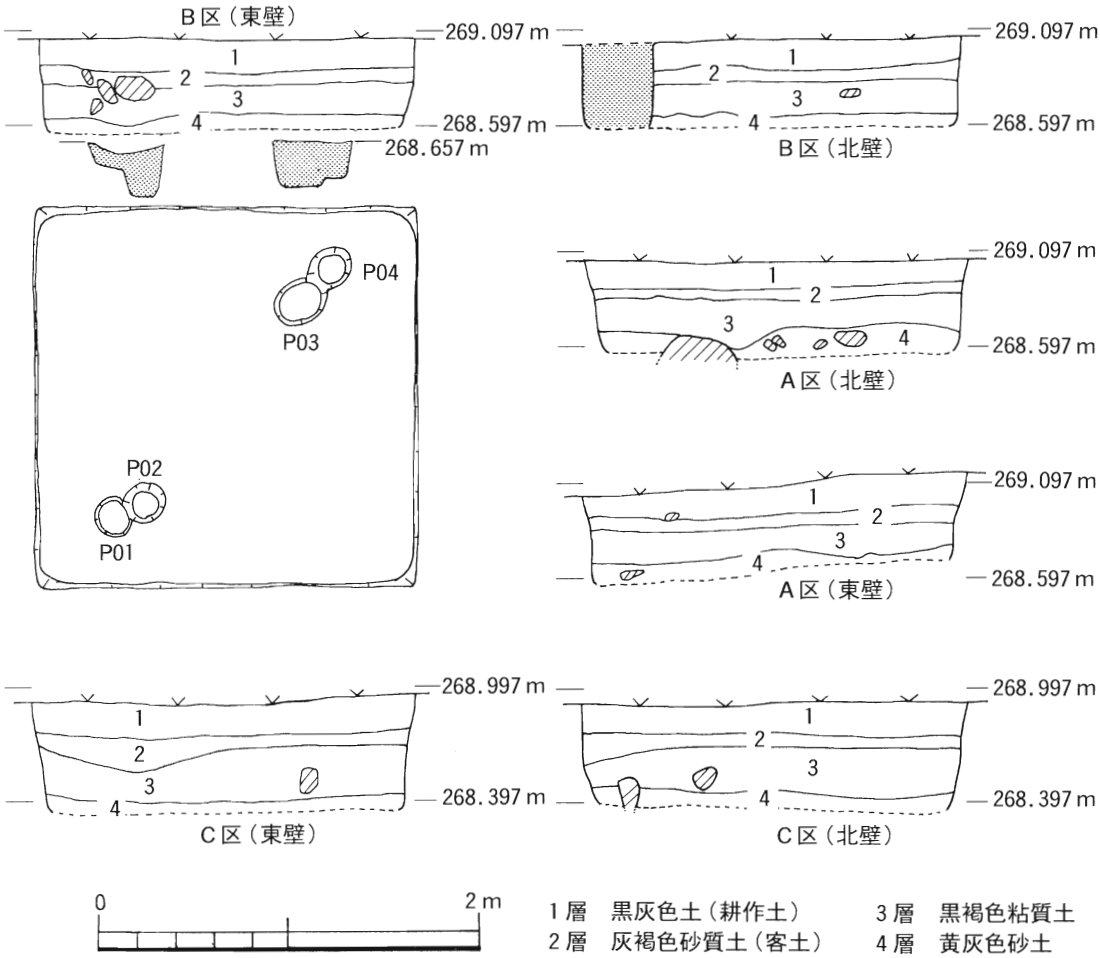
したがって調査区名は南西に設定したA区を中心に右廻りにB区，C区とし，調査面積は12㎡である。

3．調査区の概要

A区（第９図）　A区の現地標高は約269.6mである。１層は，黒灰色した耕作土。層厚は10～15cmを測り，北東が薄く，南西面が厚い。２層は，灰褐色した砂質性の客土で，２～３cm大の礫を含む。遺物は出土していない。３層は，粘質性の黒褐色土で，層厚は17～22cmを測り，比較的平坦に堆積する。縄文土器，石器などの遺物が中位から下位にかけて44点が出土した。４層は黄灰色した砂土で，上面は砂粒性であるが，下位にかけては砂礫を含んだ円礫層と変化し実質的には基盤層である。遺物は出土しなかった。

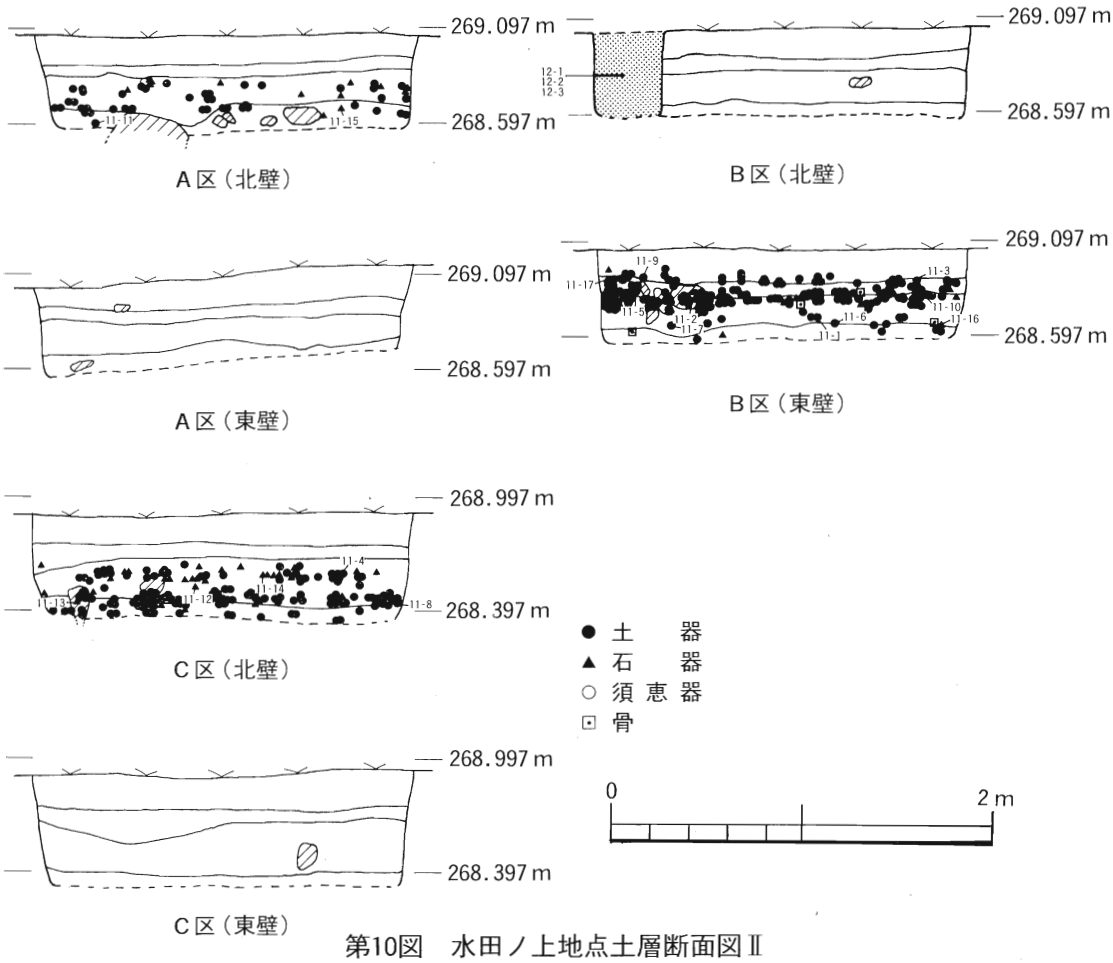


第８図　水田ノ上地点配置図



第９図　水田ノ上地点土層断面図Ⅰ

B区（第９図・写真７）　B区は河（紙祖川）寄りの調査区で，現地標高約269.5mを測る。１層は，黒灰色した耕作土で，層厚は12～18cmを測り，比較的厚い。２層は，灰褐色した砂質性の客土。層厚は６～８cmあり比較的厚く，水平である。縄文土器小片を中心に数10点が出土した。３層は，粘質性の黒褐色土で，層厚18～20cmを測り，ほぼ水平に堆積し，23cm北西（紙祖川側）西に傾斜する。遺物は上面に多く，骨片も４点出土した。また下位面には，柱穴と想定されるピットが４穴検出された（第９図）。P01は，上面長径22cm，短径18cm，深さ12cmを測る。P01に連穴するP02は，上面径約20cm，深さ27cmを測る。またP03は，上面長径27cm，短径23cm，深さ23cmを測り，P04は，上面長径23cm，短径20cm，深さ20cmであった。それらの坑内には遺物が出土されており，伴出遺物としてみることができる。４層は，粘性の黄灰色砂土で，下位面には２～３cm大の砂礫を含む。遺物は出土していない。



第10図　水田ノ上地点土層断面図Ⅱ

C区（第９図）　C区は調査域の東面にあたる調査区で，現地標高約268.92mを測る。１層は黒灰色土の耕作土である。層厚は14～20cmを測り，東面（山裾側）が全体に厚く，北西面（紙祖川側）に３cmばかり傾斜する。遺物は出土していない。２層は灰褐色砂質土の客土。層厚は５～10cm測り，下位の層界面は緩曲する。２～３cm大の礫を含み，西壁に向って僅か陥ち込んでおり，また東壁を見る限り緩曲した陥ち込みがやはり見られる。３層は黒褐色粘質土で，やや砂性である。層厚は凡そ25cmで，３mばかり北西面に傾斜する。下位面を中心に遺物が出土した。４層は黄灰色砂土である。若干砂礫を含み，上面の層界はほぼ水平に堆積する。出土遺物は稀薄であった。

４．出　土　遺　物

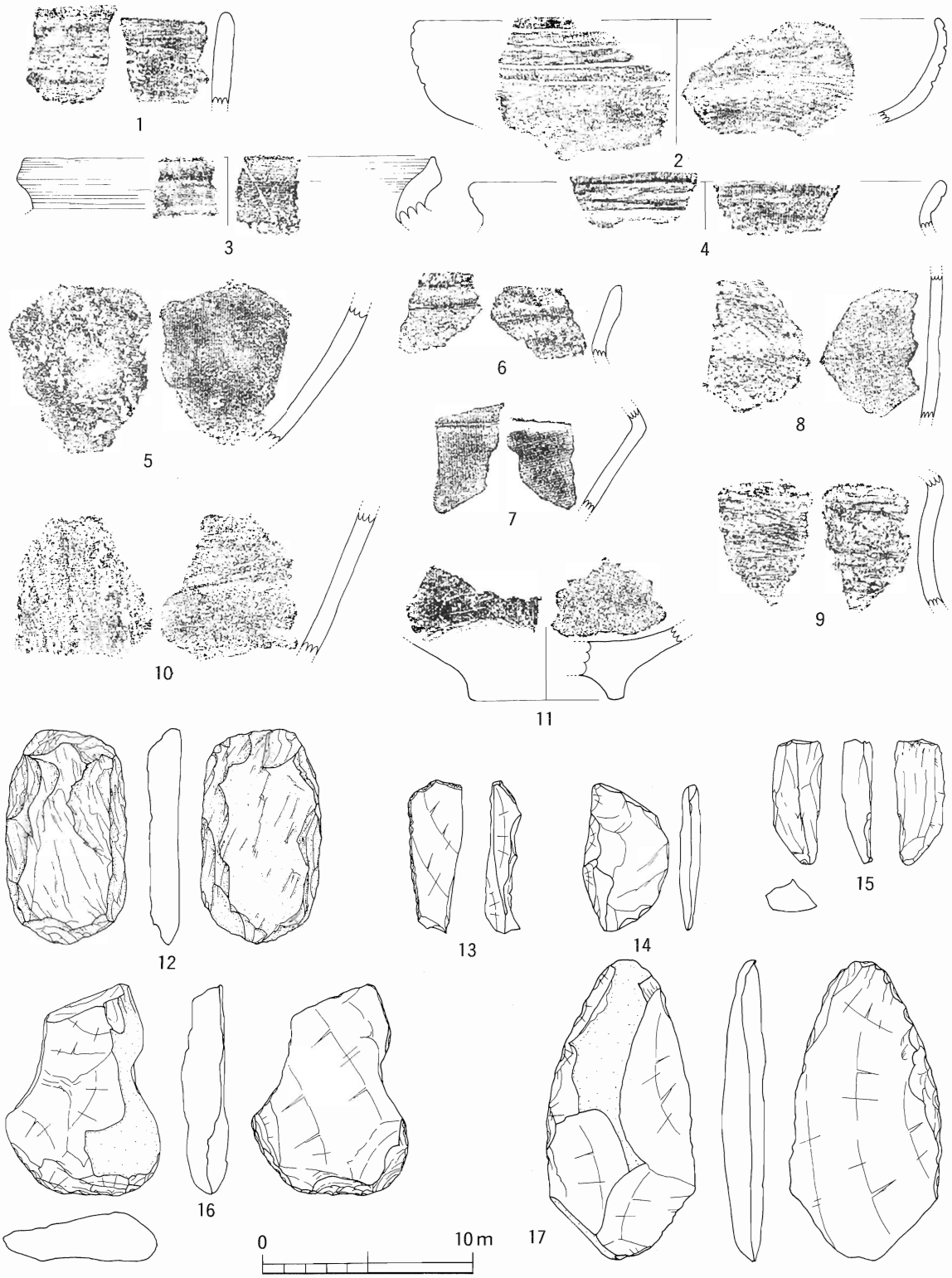
本調査地点では，縄文土器281点・石器剝片42点・石斧８点・乳白色黒曜石４点・石錘２点・弥生土器１点・須恵器１点・骨片１点の計340点が12㎡の調査面積から出土した。最も多く出

土した調査区はＢで，本区からはピット４穴も検出されている。

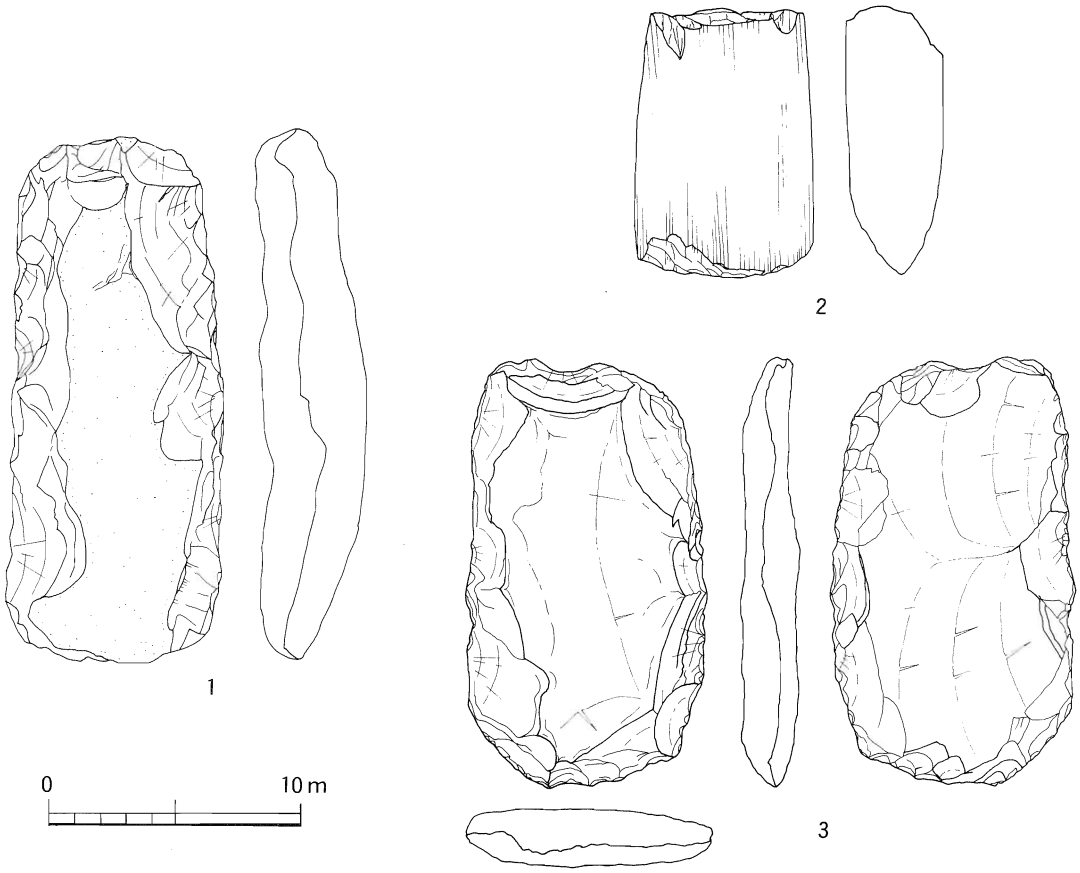
土器（第11図・写真８）　１は粗製土器の口縁部。内外を条痕で調整し，内面はナデ仕上げ。口縁端部の稜はやや内寄り。胎土に２㎜大の砂粒を含み，外面は褐色，内面は黄褐色を呈する。２は，Ｂ区の３層上面に出土した精製土器。口縁外面に直線の幅狭の沈線を施す磨消縄文。縄文帯は貝殻頂部による疑似縄文。器肉は薄く，口縁部にかけて強く内湾する。文様帯の下半は，内面とも条痕調整の後，磨く。色調は黒褐色を呈する。３は，Ｂ区の客土に出土した弥生土器の繰り上げ状の口縁部。内外ともハケ目調整をし，端部はナデ仕上げとする。外面は淡灰色，内面は淡茶色を呈する。４は「く」の字短く立ち上がる口縁部。頸部外面に不調な沈線を２，３条横位に重複させ，口縁部をやや肥厚させる。口縁端はヘラ状具で外傾気味に円みをとる。内外ともナデ仕上げとし，黒褐色を呈する。５は，Ｂ区の２層に出土した浅鉢形の胴部。外面はヘラ調整とみられるが，腐朽のため不明。内面は丁寧にヘラ磨きし，色調は黒茶色を呈する。６は，粗製土器の口縁部で，内外をヘラで整形した後，ナデ調整する。口縁外面に稜をもつアクセントがみられ，口唇は外面に頂をもつ。色調は赤褐色を呈し，煤が口縁端にみられ，内面は茶灰色。７は浅鉢形の精製土器で，口縁部面に折曲する段をもつ。内外とも精緻な研磨が施され，黒褐色を呈する。８は，粗製土器の胴部。外面を抜状具によるハケ目調整を施す。内面は丁寧なハケ目調整。９は，内外とも条痕調整を施す粗製土器の頸部で，胎土に石英の砂粒を含む。色調は淡茶色を呈し，内面には煤が付着する。10は，Ｂ区の３層上面に出土した粗製土器の胴下半部。外面は抜状具による縦位方向の粗い調整を施すが，内面は横位に丁寧である。11は，粗製土器の底部で，底面から折曲して立ち上がる。底部外面は凹レンズ状を成し，径が比較的小さい。外面は条痕調整とし，内面はナデか。色調は外面黄褐色，内面は全体に煤が付着し黒褐色を呈する。

石器（第11図・写真８）　12は，Ｃ区の３層に出土した打製石斧。石材は流紋岩と思われ，板状節理に破れる。周辺を粗く剝離を加え調整している。器重は116ｇである。13は，Ｃ区の３層下位面に出土したガラス質安山岩（角閃石安山岩）で，縦剝ぎとする。腹面に数次の横剝ぎ痕がみられ，一側は自然面を残す。14は，風化した安山岩で，Ｄ形を示すものの，側面を丁寧に剝離を加えていることから，石匙とみるよりは石篦として捕えた方がよいであろう。16・17は打製石斧。石材はいずれも安山岩で，前者は分銅形，後者は木葉形を呈する。

第12図・写真９は，Ｂ区の排水溝の３層から出土した石斧。１は流紋岩で，器長21㎝，刃部器幅8.5㎝，器重740ｇを計る。腹面に孤状を成し，背面の周辺を粗く調整し，中央部に自然面を残す。２は，蛇紋岩質の磨製石斧で，刃部と基部が折損する。３は，板状に節理する貢岩質の打製石斧。



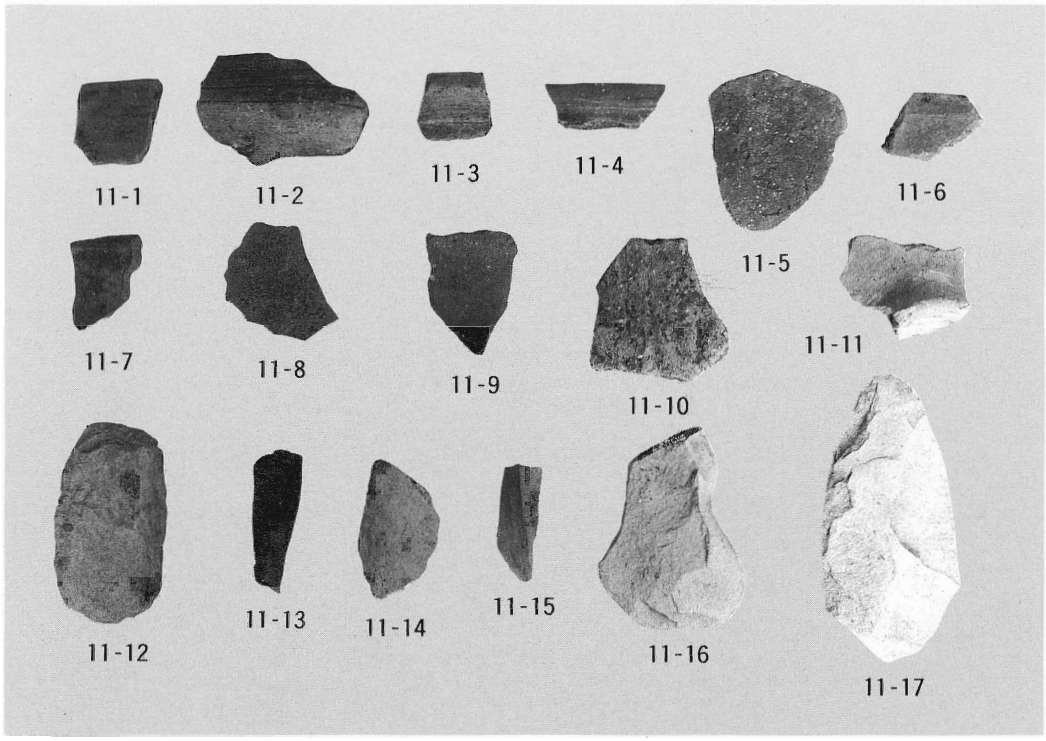
第11図　水田ノ上地点土器・石器実測図Ⅰ



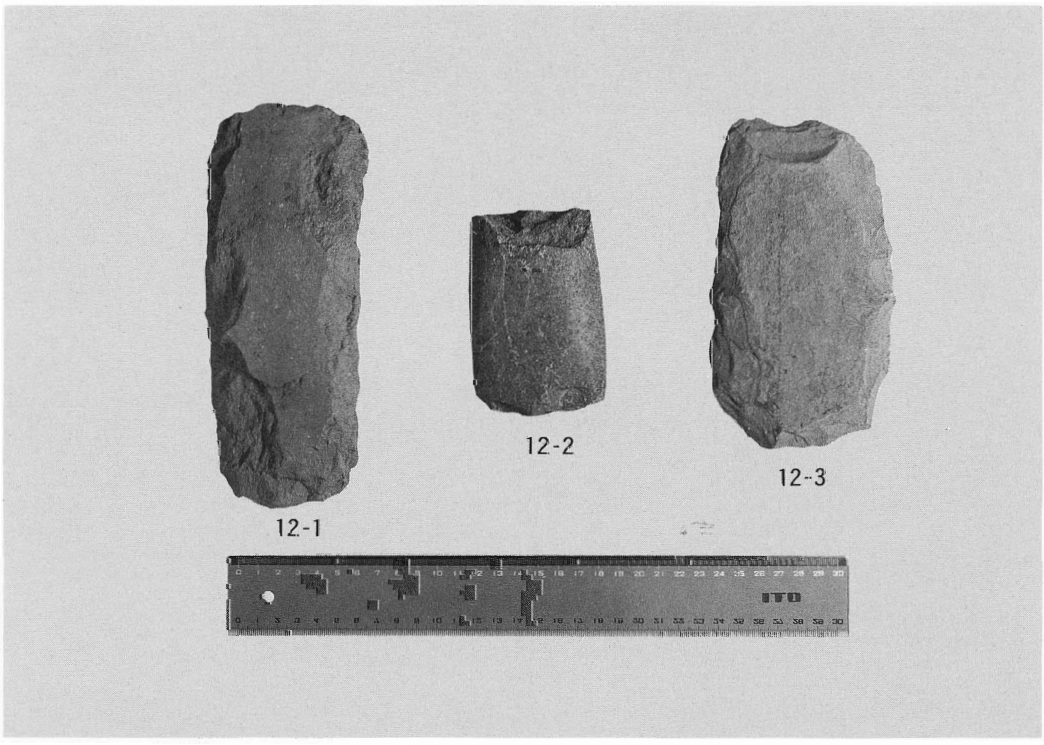
第12図　水田ノ上地点石器実測図Ⅱ

6．水田ノ上調査地点近景（南西から）

7．B区北壁と検出されたP01・P02の状況



8．水田ノ上地点の出土遺物



9．排水溝から出土した石斧

第5章　平田調査地点

1．はじめに

本調査地点は，匹見町大字匹見字江田に所在する。本地点は，西流する匹見川と北流する広見川の２川が合流する下流域に位置し，その２川がつくった氾濫原に立地する。また下流の西端には，紙祖川が北東流して相会しており，それらの河に対峙し独立地形を成している（第13図，写真13)。そうした地形的立地のためか，地内には急傾斜の井堰山に横穴式石室をもつ江田古墳群，東面の段丘地には弥生後期の江田平台遺跡，また森谷という地名が示すように，そこには匹見開発の祖神といわれる八幡の聖地などの遺跡が点在している。

調査は，平成元年11月２日から11月21日までの８日間を要し，２ｍ×２ｍの調査区４坑，16㎡を対象とした。

2．調査の概要

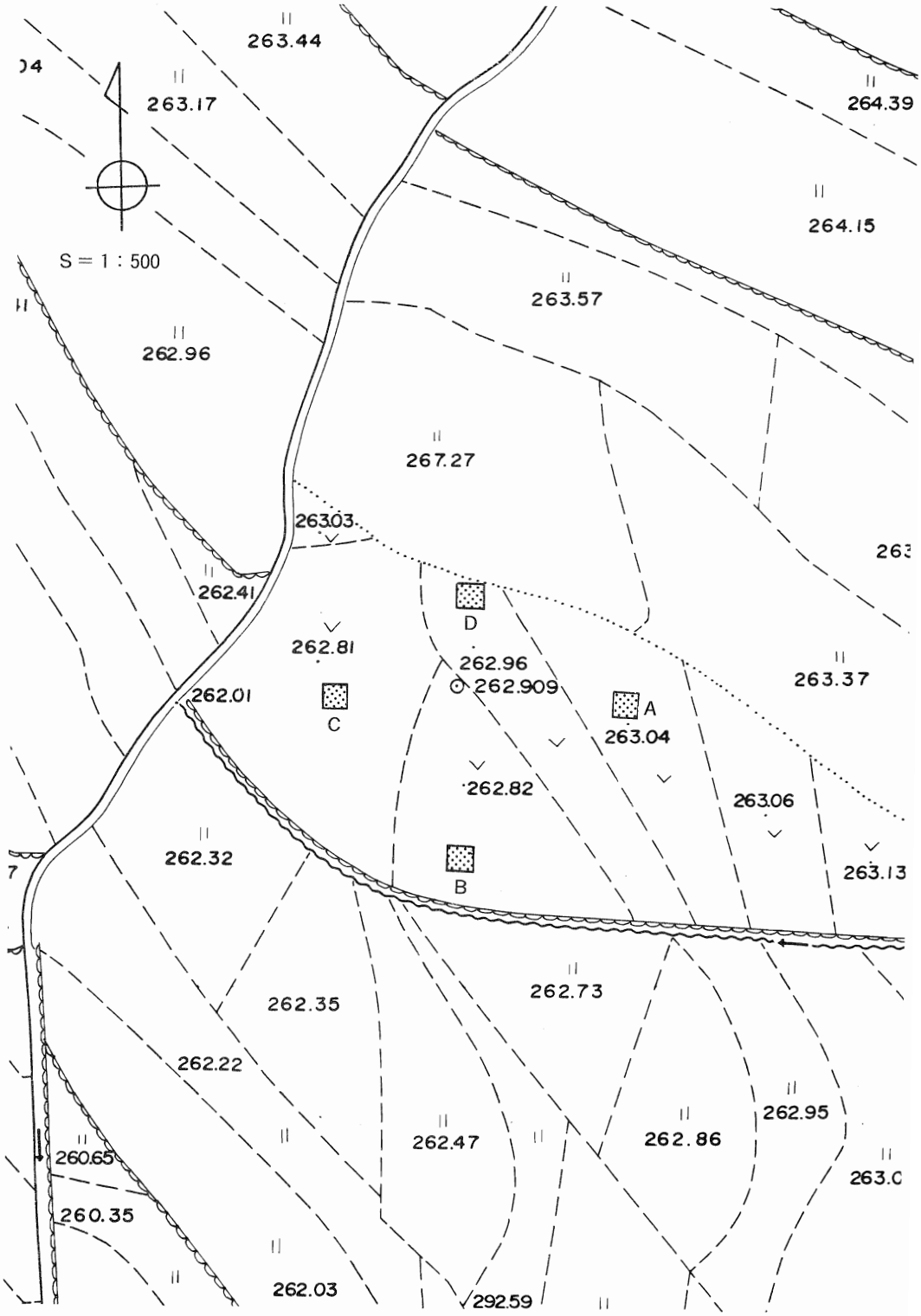
本地点は地内のほぼ中央に位置し，標高約262.9ｍを測る休耕田を調査対象地とした。まず調査区を設定しようとした，ほぼ中央位置に基点杭（202.909ｍ）を任意に設定した。その基点から東に12ｍ測った地点に２ｍ×２ｍの調査区を設け，その調査区をＡと称することにした。Ｂ区は，基点から南に10ｍ測った地点に設け，Ｃ区は西に８ｍ測った地点に設定した。さらにＤ区は８ｍ測った北面に設けたのである。

調査地点の南150ｍ地点を比高差約８ｍ測って周流する匹見川がひかえているとはいえ，湿田，しかも極度な粘性の強い粘土質に阻まれ，調査は困難をきわめた。その成因は恐らく粘土質に加えて，特に山裾からの伏流水によるものと思われ，まさしく“江田”という語源が証明する地区であった。

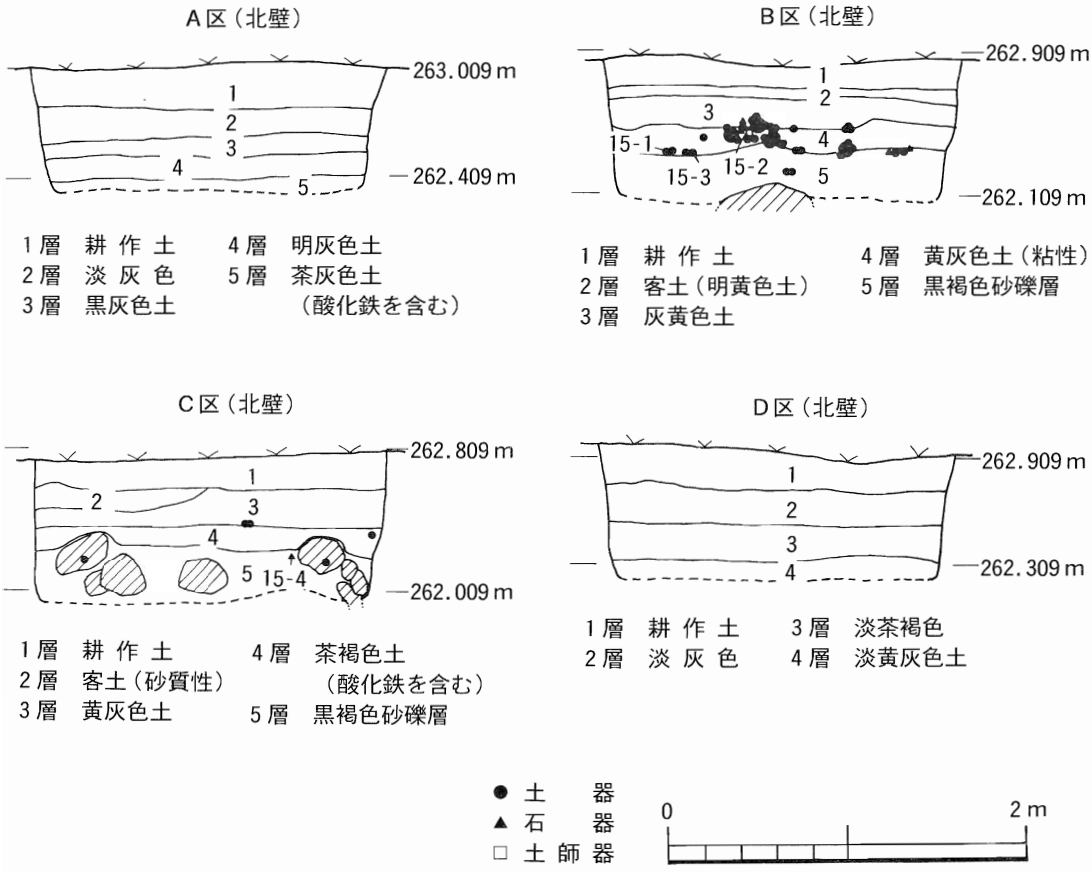
3．調査区の概要

Ａ区（第14図）　調査域の中で東面にあたる調査区で，現地標高約263.04ｍを測る。いずれの層とも遺物・遺構は検出されなかった。

１層は灰褐色土の耕作土。層厚は22～28㎝を測り，南西（匹見川側）面が薄い。２層は２～３㎝の砂礫を含んだ淡灰色土で，若干粘性がある。層厚は16～22㎝を測り，上面はほぼ水平に堆積するが，下面は南西面に僅かに傾き，厚い。３層は，粘性の強い黒灰色土。層厚は８～10㎝



第13図　平田地点配置図



第14図　平田地点土層断面図

を測り，ほぼ水平に堆積する。4層は，12～15cmを測る粘性の強い明灰色土である。5層は，酸化鉄のため茶灰色を呈し，1～2cm大の砂粒を含んだ砂土である。

B区（第14図・写真11）　B区は調査域の南面に位置し，現地標高約262.82mを測る調査区である。

1層は，粘質性の灰色した耕作土である。層厚は12～18cmを測る。2層は，僅かに砂粒を含む明黄色土の客土で，層厚は6～9cmを測り，ほぼ水平である。3層は，粘性の強い灰黄色土で，層厚は厚い所で18cm，薄い所で10cmを測り，下位面は若干凹凸する。遺物は出土していない。4層は，湿気を帯びたやや粘性のある黄灰色土である。層厚は8～14cmを測り，下位面は緩曲しやや砂質性である。本層からは土師器を中心に，弥生土器2点，石器剥片5点，石錘1点が北西－南東に向って筋状を成して出土した。

C区（第14図・写真12）　現地標高約262.81mを測るC区は，調査域の西面にあたる。

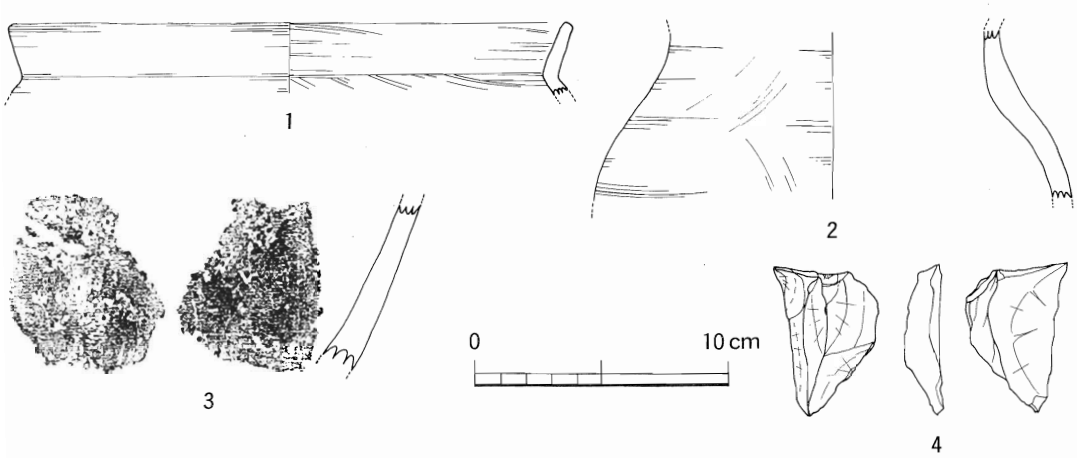
1層は，灰色土の耕作土で，層厚は12～21cmを測り，下位面の層界はほぼ水平であるが，表位面は南西面に傾斜する。2層はやや砂質性を帯びる客土。本層は南西面に偏在し，厚い所は約10cmを測るが，北東面に向って尖滅している。遺物は出土していない。3層は，粘質土の黄灰色土。下位面の層界面は，ほぼ水平に堆積しているが南西面は（匹見川側）に2層の明黄色土が陥入するだけ層厚は薄く，厚い部分で約21cmを測る。遺物・遺構とも検出されていない。4層は，酸化鉄を含む茶褐色土。層厚は約14cmで，遺構は検出されていないものの，土師器5点・石器剝片1点の計6点が南東面に点在して出土した。5層は，5～25cm大の円礫を含んだ黒褐色の砂礫層で，本地点の基盤層であろう。遺物・遺構とも検出されてない。

D区（第14図）　本調査区は，北面（山裾側）に位置する区で，現地標高約262.96mを測る。1層は灰色土の耕作土で，層厚は20～23cmを測り，北西面が厚く，南東面に約7cm傾斜している。2層は，層厚約21cmを測る砂礫を含んだ淡灰色土で，粘性の強い層である。客土は認められず，ほぼ水平に堆積する。3層は，淡茶褐色土で，層厚は16～22cmを測る。4層は，やや砂質性を帯びる淡黄灰色土。各層とも遺物および遺構は検出されなかった。

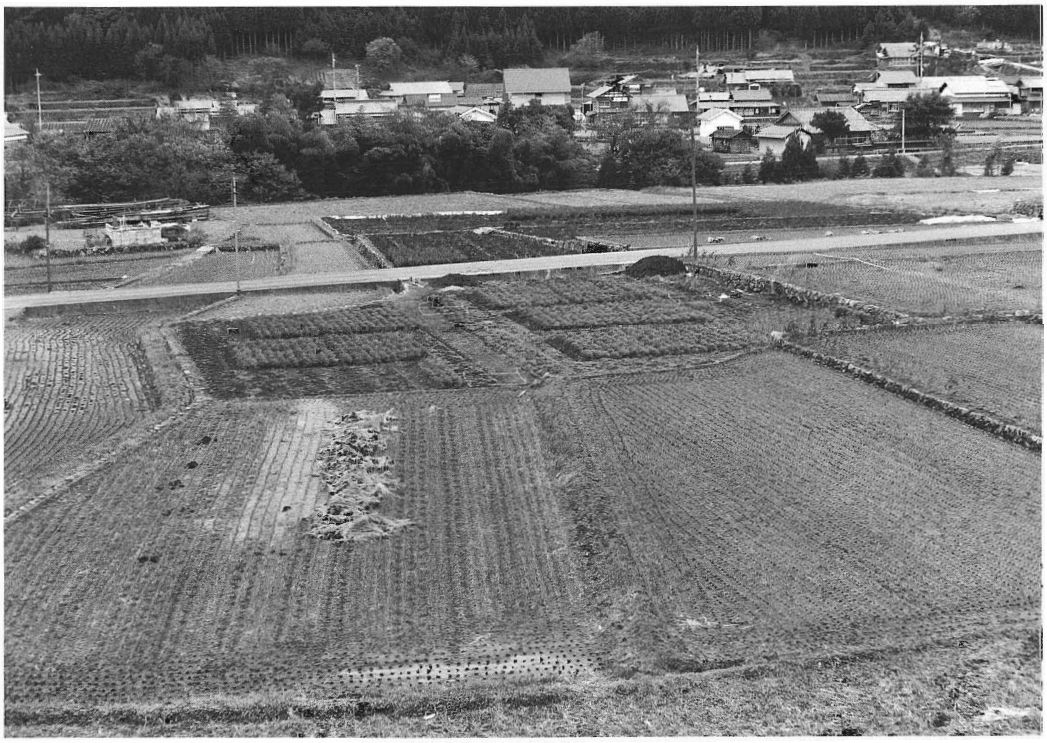
4．出　土　遺　物

本地点では，土師器53点・石器剝片6点・弥生土器2点・石錘1点の計62点が出土した。そのうちB区では，土師器48点・石器剝片5点・弥生土器2点・石錘1点，またC区では土師器5点・剝片1点であった。全体的に小片で，しかも湿田地という立地から腐植されたものが多く，したがって僅かしか図掲していないので承知願いたい。

出土遺物（第15図・写真13）　1は，壺の口縁部と思われる。頸部は「く」に折曲し，外傾して立ち上がり，端部は2段に角をもつ。器肉は器体に比べて薄い。外面はナデ調整とし，内面はヘラ削りの後ナデ調整する。色調は内外とも橙褐色を呈し，僅かに煤が付着する。胎土は緻密で，焼成はきわめて良好である。2は，胴部上半から頸部にかけての土師器甕。外面に横位のナデがみられ，酸化鉄のため色調は茶褐色を呈し，胎土に2～3㎜大の砂粒を含む。内面は腐蝕のため剝がれ落ち，本来をみきわめることができない。3は，胴部下半の土師器で，底部面は器肉は厚いが，上半に向って薄くなる。外面は腐蝕のため2～3㎜大の砂粒が露頭し，表面の調整ははっきりしない。内面も同様に底面に僅か横位のヘラ削りが認められるものの，上面は砂粒が露頭し，調整は不明。4は，C区の4層下位面に出土した石器剝片で，石材はガラス質安山岩。背面に4か所からの打裂がみられるものの，二次加工としての細部加は認められない。また腹面には横縁からの加撃による単一打裂があって，鋭角面を成し削器としての機能が考えられる。



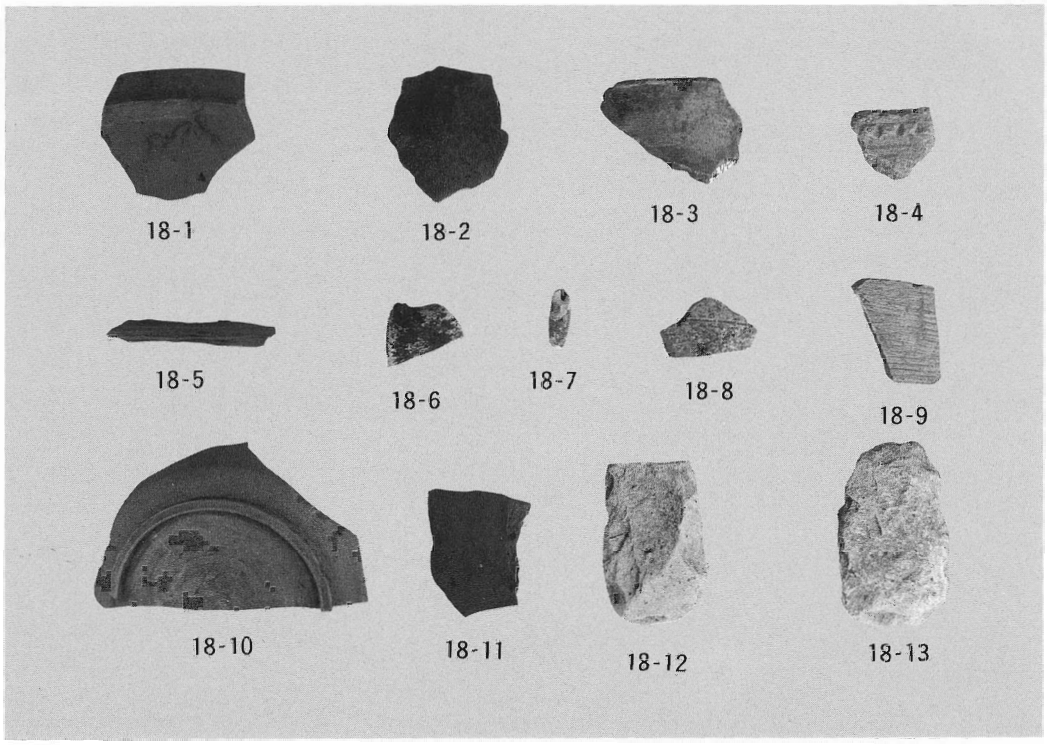
第15図　平田地点土器・石器実測図



15. 土井分調査地点近景（北西から）

16. C区北壁状況

17．D区北壁状況



18．土井分調査地点出土遺物

第6章　土井分調査地点

1．はじめに

本地点は，匹見町大字匹見字植地に所在する。該地は，北流する広見川の左岸にあって，比高差約10mを測る顕著な河岸段丘に立地している（写真15)。北西の指呼の丘陵地には，弥生後期の土器などの遺物が出土した松田原遺跡，また南東400m上流の河岸段丘には古墳時代終末期から奈良時代のものと想定される土師器・須恵器などが出土するサクノチ遺跡などが存在している。

現地標高約272.7mを測る本地点の調査は，平成元年11月14日から11月21日のうち，6日間を費し，2mの方形区4坑，16㎡を調査した。

2．調査の概要

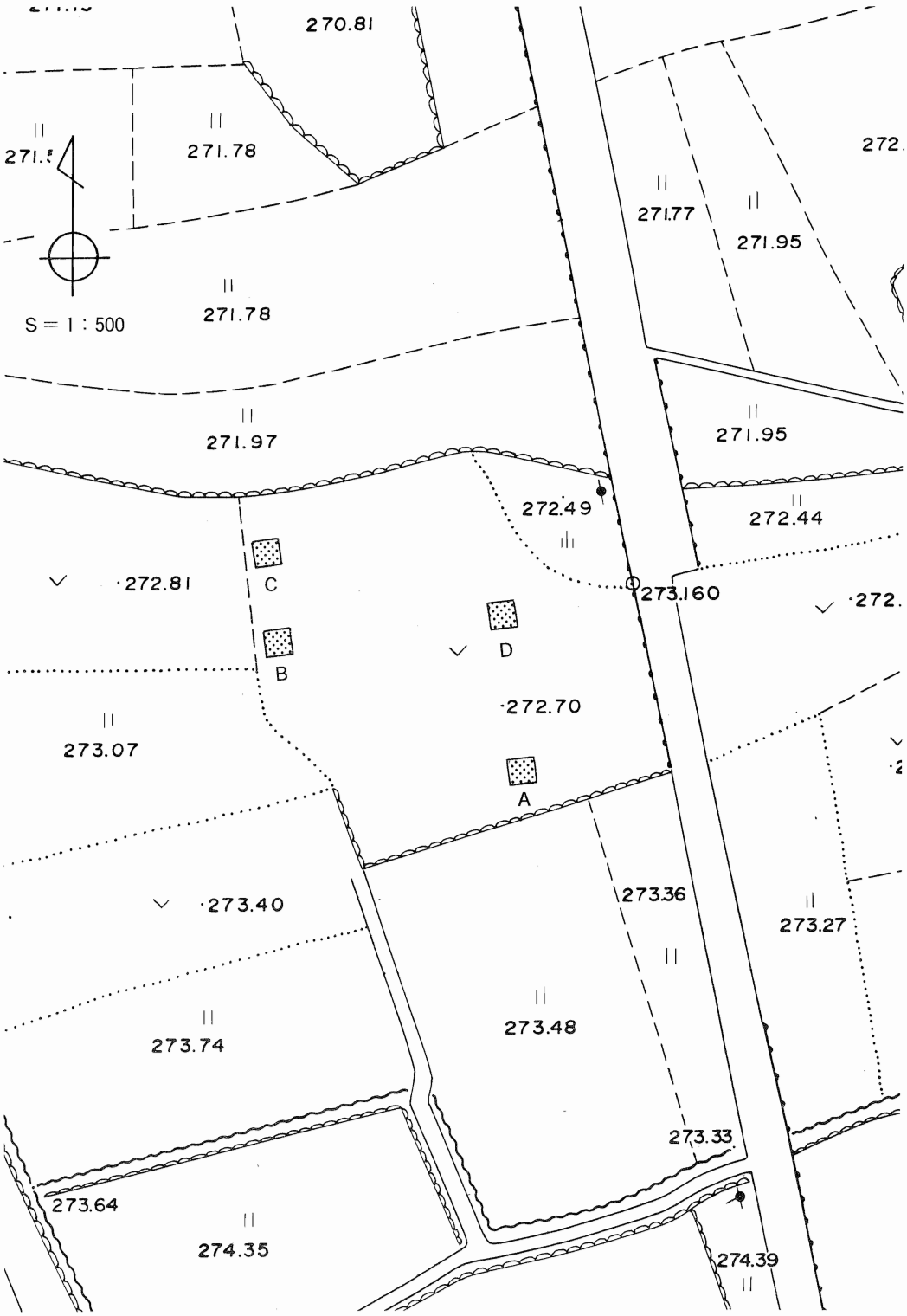
杉の苗圃であった本地点は，早くから土師器や須恵器などの小片が散在していたため，凡その遺跡域は限定することが推定できた。また基準点は測量業者によって，側沿（東面）を通る道路脇に設けられていたので，それらを使うことにした。

調査区は2mの方形区とし，A区と称するものをまず調査域の南面に設定した。そしてD区と称する調査区は，A区から磁北方向に10m測った地点に設けた。またB区・C区と称する調査区は，西面の状況を把握するためのものとし，そのうちB区はD区から西に15m測った地点に設定したのである。さらにC区と称する調査区は，B区から磁北に向って5m測った地点に設け，したがって地区名はA区を中心に，右回りにB区・C区・D区と呼称するようにした（第16図)。

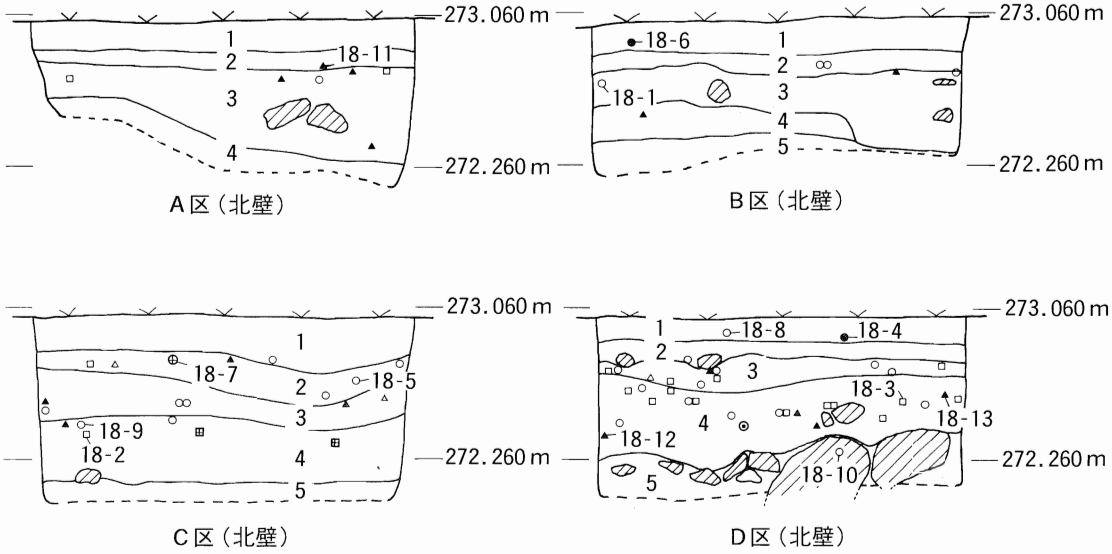
3．調査区の概要

A区（第17図）　現地標高約273.06mを測るA区は，調査域の中で南面にあたる調査区である。その2m南面は約1mあまりの石垣が築かれていて段を成し，水田地となっている。

1層は黒色した耕作土。層厚は14～17cmを測り，北東面は3cmばかり厚い。2層の客土は，1～2cmの礫を含んだ灰色土である。北東面は10cmと厚いが，斜面を成す南西面は部分的に尖滅する。本層から1点のガラス質安山岩の石器剝片が出土している。3層はやや粘性を帯びた黄灰色土で，25cm大の円礫を含む西壁の層厚は12～20cmを測り，北壁面に陥入し，また東壁は40



第16図　土井分地点配置図



第17図　土井分地点土層断面図

～50cmあって，北壁に向って陥入している。したがって本層は，北東面に深く陥入していることになる。また遺物は，上面に石器剝片・土師器・須恵器などが数点，下位面に１点の石器剝片が出土している。４層は有機土と思われる黒灰色土で，やや粘性を帯びる。遺物は出土していない。

B区（第17図）　B区は西面に設定した調査区で，現地標高約273.04mを測る。その１層は，黒色土の耕作土。層厚は16～18cmを測り，僅かに北東面が厚い。本層からは１点の縄文土器が出土している。２層は客土で，若干礫（１～２cm大）を含んだ灰色土である。層厚は８～10cmを測り，比較的厚い。上面はほぼ水平であるが，東壁に向って僅かに陥ち込むので，それだけ厚くなっている。３層は，砂質性の黄灰色土で，20cmあまりの礫を含む。層厚は，西壁から約20cmでほぼ水平に東面に延びるものの3/2辺りで４層との層界は急斜して陥入する。またその陥入部分には砂礫が多く，河道の流路の可能性が強い。このような状況は，A区の３層でも確認されている。遺物は上面を中心に４点の須恵器，１点の石器剝片が出土した。４層は黒灰色土で，若干砂質性である。土質的には表土の耕作土と類似しており，同質かも知れない。しかし

間層である３層がはっきり分層されている状況からみると，３層の黄灰色土は匹見川の越流等による嵌入層とみられないでもない。層厚は西面を中心に20cmを測るが，次第に東面（匹見川側）に向って薄くなり，東面は上層３層が嵌入し消去する。遺物は上位面から１点の石器剝片が出土した。５層は拳大の円礫を含む砂礫層である。本層の基盤層と思われ，遺物は出土しなかった。

C区（第17図・写真16）　標高約272.99mを測るC区は，西面（山裾側）に位置する調査区である。

１層は耕作土である。薄い部分で18cm，厚い部分では30cmを測り，下位面は緩曲する。２層は，２～３cmの礫を含んだ灰色土である。西壁・東壁の両壁寄りは８～10cmと，ほぼ水平であるのに対して，中央よりやや東壁寄りの部分は８cmばかり陥入し，その厚さは16cmを測る。また東壁をみると，北壁寄りに層厚20cmを測る陥入部分があって，全体的に下位面が緩曲に凹凸している。遺物は須恵器４点，土師器・石器剝片・陶磁器・土錘などが各１点ずつ出土した。３層は，砂質性の黄灰色土で，若干，拳大の円礫を含んでいる。層厚は12～28cmを測り，西壁と東壁寄りは厚く，３層が陥入した部分は薄くなっている。４層は，２～３cmの礫を含む黒灰色土である。下位面に円礫を含み，やや砂質性を帯びる。層厚は30～35cmを測り，上面は東面に凹状の緩曲線を描く部分がみられ，その分だけ薄い。上面を中心に須恵器２点・鉄器２点・土師器１点が出土する。５層は，15～20cm大の円礫を含む砂礫層で，本層の基盤層である。遺物は出土していない。

D区（第17図・写真17）　現地標高約272.99mを測る。

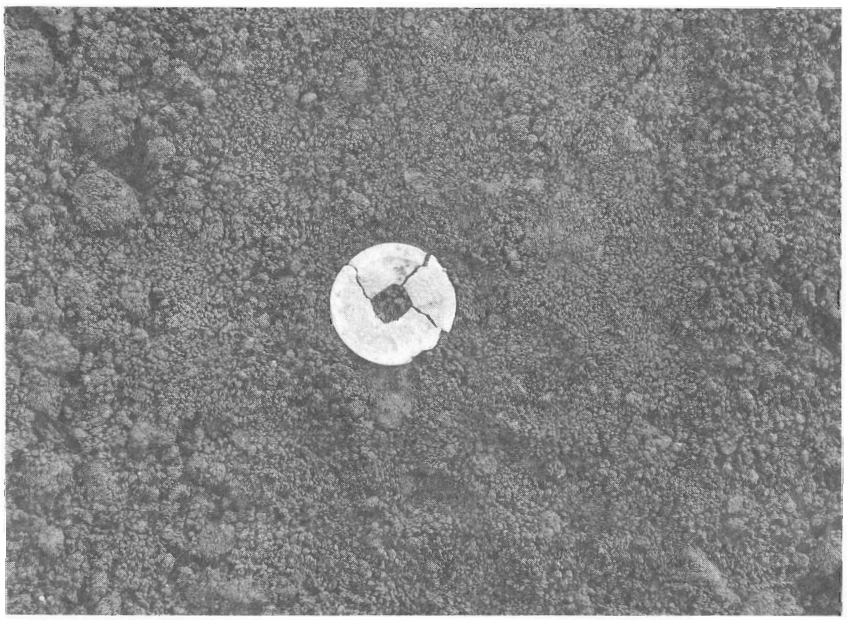
１層は，黒色土の耕作土。層厚は11～14cmを測り，下位面は３cmばかり東面（広見川側）に傾き，その分だけ東面は厚い。２層は，灰色土の客土。砂礫を含みやや粘性を帯びる。３層は，黄灰色砂質土である。他調査区に比べて礫が多い。層厚は７～18cmと，厚薄がはげしく，また他調査区に比べて層が薄い。土師器・須恵器など11点が出土した。４層は黒灰色砂質土で，拳大の礫を多く含み，層厚は33～40cmを測る。層界面は緩曲線を描く。土師器を中心に22点の遺物が出土した。５層は，50cm以上の石体が露頭する円礫層で，実質的には河床礫である。遺物はない。

４．出　土　遺　物

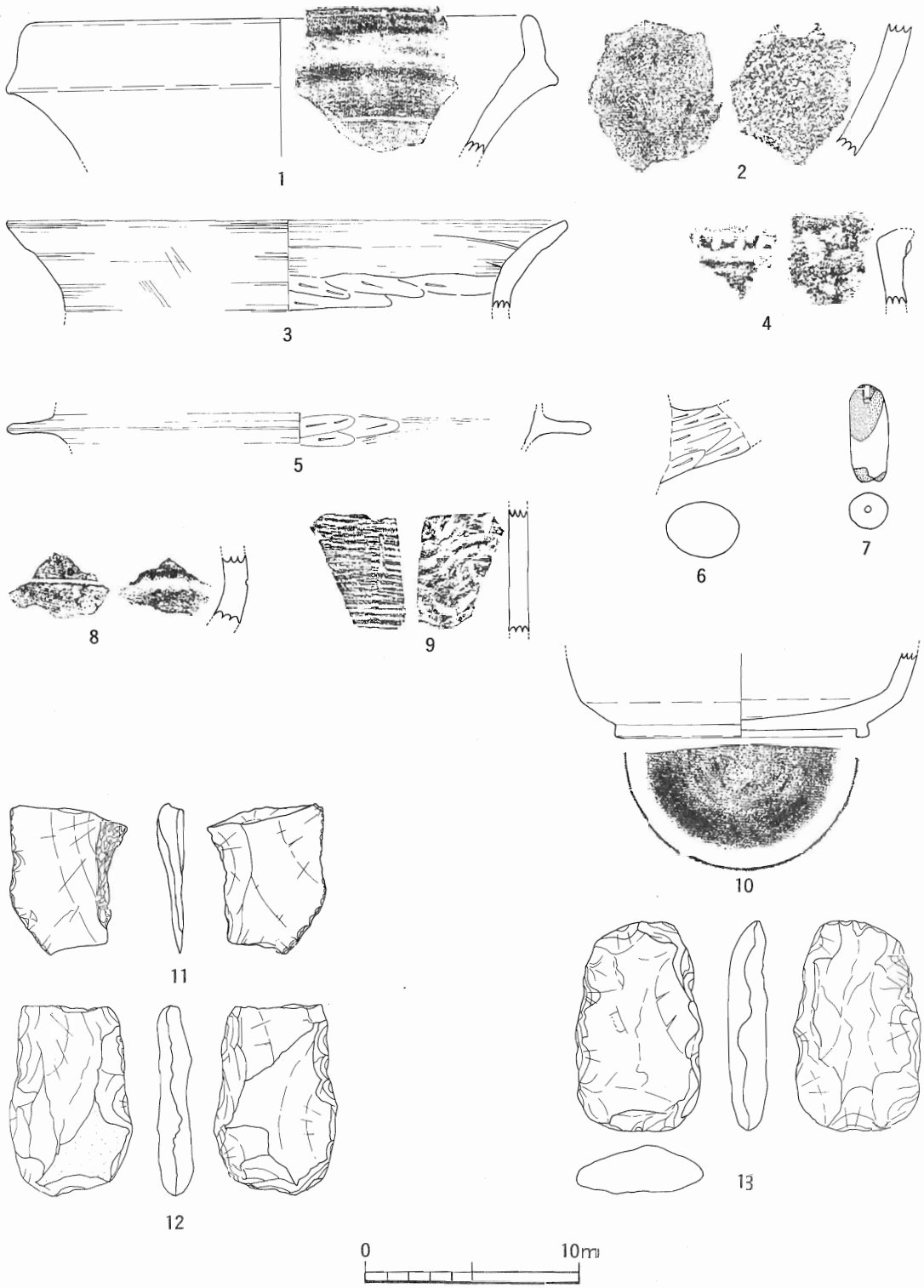
本地点からは須恵器26点・土師器17点・石器及び剝片15点・陶器３点・鉄器２点・土錘１点・銭貨１点と，耕作土中６点の合わせて71点が出土したが，遺物の転移等が認められ，特定の包含層は限定することはできなかった（第18図・写真18）。なお，銭貨は「皇宋通宝」と刻印さ

れている宋銭であった（写真14）。

1は，B区の3層直下に出土した擂鉢。口縁部外面に突帯状のものをそなえ，文様はなくナデ仕上げである。胎土に僅か2㎜大の砂粒を含み，断面の外周面は黒灰色，胎土内は茶灰色で，また体部は茶褐色を呈している。おそらく備前系のものであろう。2はC区の4層に出土した土師器の胴部で，内外面に微かにハケ目調整がみられる。色調は赤褐色を呈し，外面に煤が付着し，焼成はきわめて良好である。3は，D区の4層に出土した土師器の口縁部。「く」の字形に立ち上がり，口縁部の器肉は比較的薄い。内外面ともナデ仕上げとするが，内面頚部下半はヘラ調整が顕著である。外面口縁端に煤が付着し，色調は黄灰色。4は，D区の耕作土に出土した縄文土器の口縁部。内湾して立ち上がり，口唇部は外面に稜をもつ。頚部は短く，外面に凸帯をもちヘラ状具で刻みを施文する。色調は赤褐色を呈する。5は，釜の縁部。内面はヘラで調整の後，縁部ともナデで仕上げる。縁部上面に煤が付着する。6は体部に貼り付けた甑の把手であろう。7は，土錘。8は，外面に1条の沈線をもつ須恵器の胴部。内外ともナデとし，外面に灰釉を施す。9は，外面カキ目，内面は同心円の叩きとする須恵器の胴部。10は，D区の4層下位面に出土した台付壷の底部。高台径約11.5㎝を測り，立ち上がり部分は厚く，外面にくっきりとした稜のアクセントがみられる。切り離しは回転ヘラである。11～13は石器類。その11は，ガラス質安山岩による削器。横剝ぎで得られた剝片の一側縁を，極浅に両面調整を施す。12・13とも安山岩質の撥形打製石斧。全体に風化し，淡灰色を呈する。



14. 銭貨出土状況

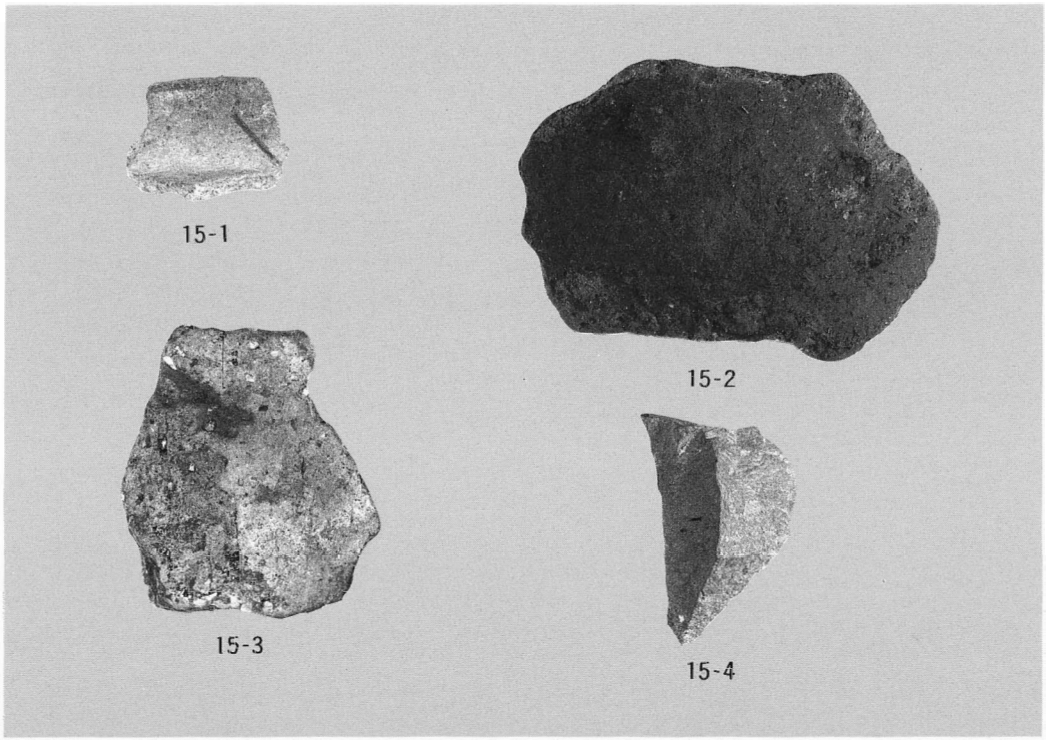


第18図　土井分地点土器・石器実測図

10. 平田調査地点近景（北から）

11. B区北壁状況

12. C区北壁状況



13. 平田調査地点出土遺物

第７章　先ハズミ調査地点

１．は　じ　め　に

先ハズミ地点は，匹見町大字匹見字黒和に所在する。本地点は南東流する匹見川が南西流に変流し，その蛇行部の舌状に形成された突端面に位置する。したがって10m北西面を匹見川が比高約９m測って周流し（第19図・写真19）まさしく字名の黒和（クルワ）に等しい地形に立地している。100m東側の丘陵地には弥生後期と想定される上黒和遺跡があり，また南東200m地点の丘陵地にも弥生土器の散布地が確認されている。

標高約270.69mを測る本地点の調査は，平成元年10月13日から10月23日のうち５日間を費し，２mの方形区４坑，調査面積16㎡を行った。

２．調　査　の　概　要

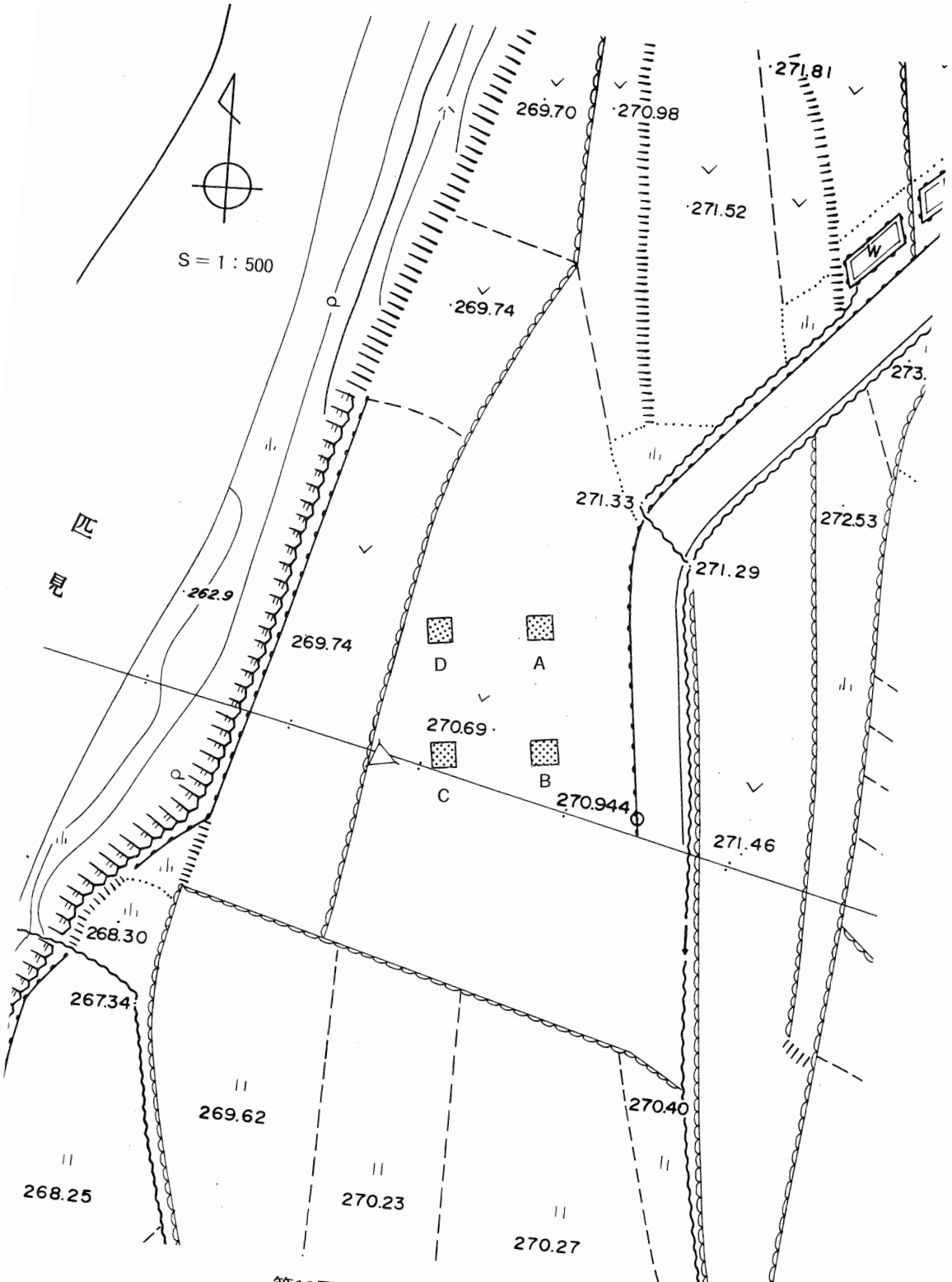
本調査地点を調査の対象地として選定したのは，以前から遺物の散布地であったからである。その地点は杉の苗圃地で，字名を「先ハズミ」と称することから，その字名をもって調査地点名とした。

まず２mの方形区を４箇所設けることとし，その位置は遺物が散布する箇所をとり囲むように設定した（第19図）。つまり，任意に設定した起点を中心に北西面へ２m×２mの調査区を設け，これをＡ区と称することにしたのである。そして南側に８m測ってＢ区を設定。さらに西へ６m振り，その地点にＣ区と称する調査区を，Ｄ区はＣ区から磁北方向に８m測った地点に設定したのである。したがってＤ区は，東面のＡ区との差は６m測った間隔となる。なお基準点は，Ｂ区の南東８m地点（270.944m）に設定した。

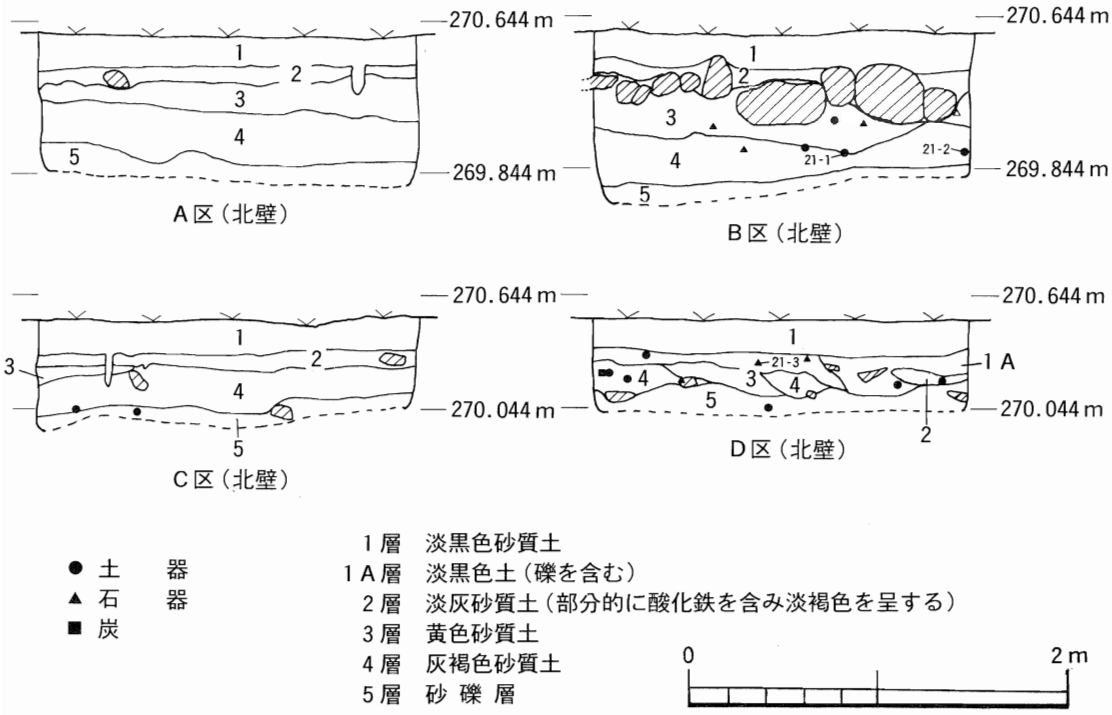
３．各調査区の概要

Ａ区（第20図）　Ａ区は調査域の北東面に設定した調査区で，現地標高約270.77mを測る。本調査区からは遺物及び遺構は検出していない。

１層は，淡黒色砂質土の耕作土。層厚は14～19cmを測り，西面（匹見川側）が厚い。遺物は出土していない。２層は客土で，淡茶褐色粘質土である。層厚は６～９cmを測り，酸化鉄を含んでいる。３層は淡黄色砂質土。西壁寄りは７～10cmを測るが，東壁側は22～24cmを測り，下位面は深く山裾側に傾斜する。４層は灰褐色砂土で若干２～３cmの砂礫を含む。上面は僅かに



第19図　先ハズミ地点配置図



● 土　器
▲ 石　器
■ 炭

1層　淡黒色砂質土
1A層　淡黒色土（礫を含む）
2層　淡灰砂質土（部分的に酸化鉄を含み淡褐色を呈する）
3層　黄色砂質土
4層　灰褐色砂質土
5層　砂 礫 層

0　2m

第20図　先ハズミ地点土層断面図

西面（匹見川側）が高く，層厚は20～23cmを測る。5層は，円礫を含む黄色砂礫で，本調査区の基盤層であろう。

B区（第20図・写真20）　B区は南東面に設けた調査区で，現地標高約270.75mを測る。遺構は検出していないものの，出土遺物としては弥生土器4点・石器剝片3点・陶器1点の計8点であった。

1層は淡黒色砂質土の耕作土。層厚は13～20cmあって，北西面（匹見川側）が薄い。2層は客土で，淡灰色砂質土である。層厚は6～9cmあり，上面はほぼ水平であるものの下面は凹凸する。3層は砂粒を含んだ黄色砂質土。層厚は20～25cmを測り全体的に南東面に傾斜するが，北壁を見る限り，中央のやや東壁寄りに陥入部分が見られる。また上面に並石する20～50cmの石体は，畦畔の石垣の名残で撹乱が予想される。そのためと思われるが，西壁には1層の淡灰色土が厚さ15～20cm，長さ70cmを測る嵌入層がみられる。本層から出土している遺物は，層位的にみればそうした撹乱に伴うものと想定される。4層は灰褐色土で，下位面に若干2～4cmの砂礫を含む。下位面は北東面（匹見川側）に傾斜する。なお土層断面図にみられる遺物投影は本層のものではなく，3層の陥入部分に現出したものである。5層は円礫を含む砂礫層で，上面は匹見川側に傾斜する。

C区（第20図）　C区は南西面に設定した調査区で，現地標高約270.50ｍを測る。遺物は３層下位面に弥生土器２点が出土した。

１層は凡そ16cmを測る耕作土で，南西面に５cmばかり傾斜する。２層は，淡灰色砂質土の客土である。３層は黄色砂質土で，西壁寄りに僅かに表出する（北壁から）。また西壁を見る限り涙滴状に嵌入した部分もあって，本層は匹見川の氾濫等による流走の痕跡として捉えることができる。遺物は出土していない。４層は，拳大の砂礫を含む灰褐色砂土。層厚は15～20cmあって，10cmばかり南西面の匹見川側に傾斜し，下位面に２点の弥生土器が出土した。また20cm余りの円礫が若干みられた。５層は本調査区の基盤層を成す円礫を含む黄色砂礫層である。

D区（第20図・写真21）　D区は北西面に設けた調査区で，標高約270.70ｍを測る。遺物としては弥生土器４点・石器剝片３点・隅２点の計９点が出土した。

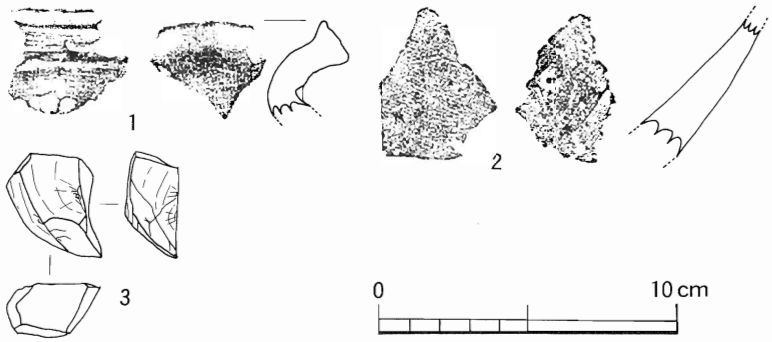
１層は淡黒色の耕作土で，やや砂質性である。層厚は17～19cmを測り，北東面が薄い。１層以下は撹乱層とみられるので，以下本調査地点での層名に従って層序を列記しておくだけにする。1Aとしたものは，淡黒色砂質土であるが２～３cmの礫を含んでおり，漸移層として捉えられる。また２としたものは，淡灰色砂質土であるため客土であろう。その客土も西面はその用途を充たしているものの，東面は欠落し，一部には漸移層に嵌入する。本層からは弥生土器や石器剝片が４点出土した。３としたものは砂粒を含んだ黄色砂土で，部分的に嵌入している。また４は灰褐色砂質土で，層序的にも３と並列し，やはり部分的に他調査でいう砂礫層の上面位に移植的に嵌入しているのである。ただし，５層と想定される砂礫層を，西壁に限って見るならば，A区でいう客土の淡茶褐色粘質土である土質のものが，帯状に北壁に向かって部分的に嵌入しているという混乱がみられるのである。

いずれにしても本層は，層序的に撹乱されているものと思われる。このような状態はB区でも認められており，特に遺物包含土は他地区から造田時に搬入されたものと考えられる。それは整然とした層序を成すA区では，１片の出土物も無かったことが証明していると思われる。

4．出　土　遺　物

本地点からは，弥生土器12点・石器剝片６点・炭（炭化物）２点・陶器１点の計21点が出土した。そのうちB区は弥生土器４点・石器剝片３点・陶器１点。C区は弥生土器２点。D区は弥生土器４点・石器剝片３点・炭２点であった。土器はいずれも小片であった。また石器剝片はガラス質安山岩で，そのうち１点は水晶である。

１は，B区の３層下位面に出土した繰り上げ状の口縁部。口縁外面に２状のクシ状工具による平行沈線を施し，ヨコナデ仕上げ。口縁部は強く折曲し，頸部外面に巻具による施文を横位



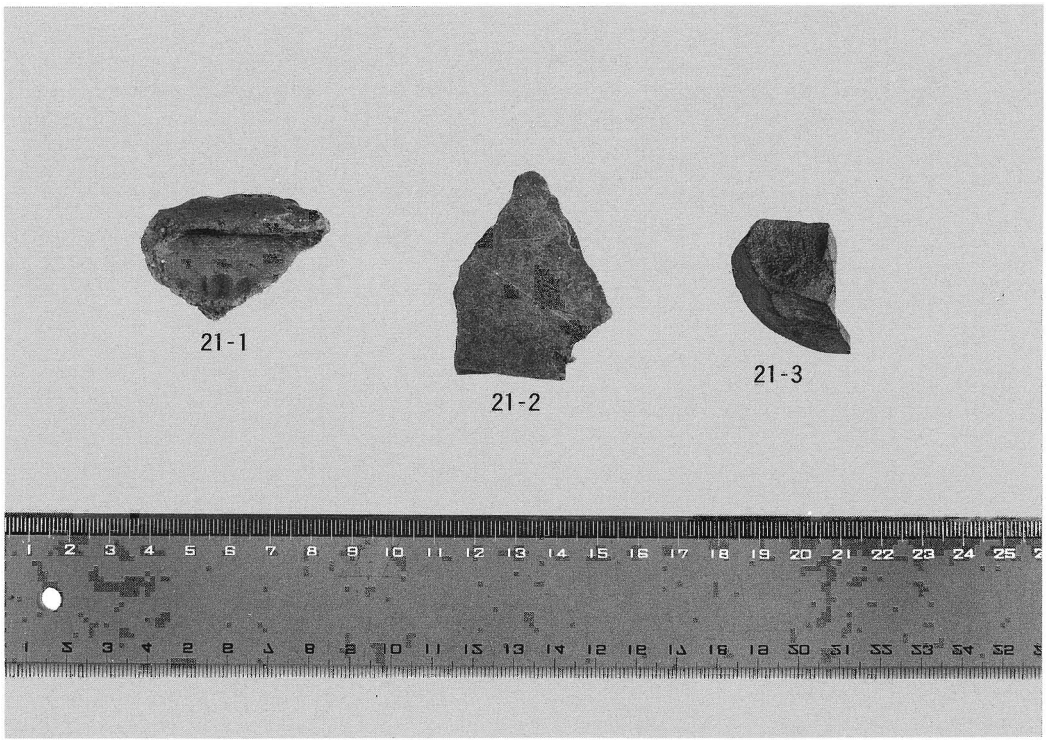
第21図　先ハズミ地点土器・石器実測図

に連続させる。内面はナデ仕上げ。胎土に２～３㎜大の砂粒を含み淡灰色を呈し，外面口唇部に煤が付着する。２は，Ｂ区に出土した弥生土器の胴下半部。底部面を肥厚させるが，胴部面にかけて薄い。外面はヘラ調整し横位のナデを施す。内面は縦位方向のヘラ調整とし，炭化物のため黒褐色を呈する。胎土に２～３㎜大の砂粒を含み，外面は橙褐色を呈し，焼成はきわめて良好である。３は，Ｄ区の客土に出土したガラス質安山岩の剝片。

19. 先ハズミ地点遠景（南東から）

20. B区北壁状況

21．D区南壁状況



22．先ハズミ地点出土遺物

平成２年３月10日印刷
平成２年３月25日発行

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ

発　行　　匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町イ1260
印　刷　　有限会社　谷口印刷
島根県松江市母衣町89